

大学礼拝
説教集

第 20 号



2016

東北学院大学

表紙の絵について

ラーハウザー記念東北学院礼拝堂は、昭和 7(1932)年 3 月に土樋キャンパスに献堂されました。J. H. モルガン（米国）の設計によるカレッジ・ゴシック洋式の礼拝堂です。収容人員は 900 名で、外壁に地元秋保産の石が使われています。シュネーダー第二代院長の米国における募金活動に賛同して献金を寄せたエラ・ラーハウザー嬢の名前がつけられています。正面のステンドグラスは、イエス・キリストの昇天（ルカ福音書 24 章 51 節）の場面を極彩色で描いたもので、英国より輸入されました。講壇向かって右側に、当時北日本唯一のオルガンとして活躍した米国モロー社の楽器がその形のみをとどめています。平成 26 (2014)年 12 月 19 日、国の登録有形文化財に登録されました。

大学礼拝

説教集

第 2 0 号

2016

東北学院大学

目次

巻頭言	宗 教 部 長	野 村 信	4
生きる意味	理 事 長 ・ 学 長	松 本 宣 郎	6
お言葉どおり	院 長	佐 々 木 哲 夫	12
究極の選択	仙 台 広 瀬 河 畔 教 会	望 月 修	18
わたしの母、わたしの兄弟	宮 城 野 愛 泉 教 会	橋 爪 忠 夫	23
聖なる夜	仙 台 五 橋 教 会	宮 川 経 宣	28
まことの光	石 巻 山 城 町 教 会	関 川 祐 一 郎	34
もう泣かなくともよい	東 北 学 院 中 学 校 ・ 高 等 学 校 宗 教 主 任	松 井 浩 樹	40
主よ、わたしたちを憐れんでください	東 北 学 院 榴 ヶ 岡 高 等 学 校 宗 教 主 任	西 間 木 順	46
創造は歓び	宗 教 部 長	野 村 信	50
結婚を祝福する神 〜カナの婚礼	大 学 宗 教 主 任	原 田 浩 司	55

対話のこころ	大学宗教主任	吉田 新	60
世を照らす光の到来	総合人文学科長	出村 みや子	65
そして彼は、難民となった	文学部教授	佐々木 勝彦	72
Forgiving Others	文学部教授	マーチー デイビッド	84
職業と信仰	経営学部教授	松村 尚彦	85
へボン	工学部教授	星宮 務	90
永遠の命	工学部准教授	長島 慎二	96
人生を変える秘訣	教養学部准教授	大澤 史伸	96
神さまのまなざし	東北学院史資料センター	日野 哲	106
編集後記	大学宗教主任	吉田 新	112

巻頭言 「第二〇号発刊によせて」

宗 教 部 長 野 村 信

命の泉はあなたにあり

あなたの光に、わたしたちは光を見る。

(詩編第三六篇十節)

今、十九冊の『大学礼拝説教集』を机の上で揃え、改めてじつと見る。多様な色で製本され、きちつとそろった背表紙が、光のプリズムのような、淡い虹のような色合いで、手のひらにずっしりと乗る。第一号は、白い表紙に泉キャンパスの礼拝堂正面のステンドグラスの写真を中央にあしらった。懐かしい。二十年という年月が経った。あのころ宗教部長であった土戸清先生が幾つかの出版物の発行を計画され、その一つが私にまかされた。宗教部の事務員と一緒に礼拝堂の真ん中に脚立を立てて、写真を撮った記憶がよみがえる。第一号は、新たな気持ちで出版するのだから、表紙は白地

にしようと意図した。その時は、二十号に至るとは想像していなかったが。

聖書の言葉を、人類に対する神の呼びかけ、神の意志として聞くキリスト者は、聖書の言葉を軸にして、時に自由に、時に必死で、神の声を聴く。読み手が真剣であればあるほど、神の声を聖書から活き活きと聴き、それを自分に、そして会衆に説く。神は人類に、人間の口を用いて御心を伝えることを望まれた。私たちはその代弁者であり、ラッパである。そこで、人類は存続する限り、神の御心を聖書から聴き続ける。巻頭の御言葉、「**あなたの光に、私たちは光を見る**」とあるように。

各巻を拾い読みしていると、この二十年間、大学の各キャンパスでどのような説教が語られたかを概観できる。しかも、この二十年間にどれほど多くのことが私たちの周りで起こり、それにふさわしく聖書から聴いたかも知える。ベルリンの壁の崩壊、二千年問題、九・一一の衝撃、そして三・一一の痛みなど、もちろん説教集に掲載されない多くの説き明かしがなされた。

新しい十年は、どのような時代になるのだろうか。いずれにせよ、私たちのまことの命、生きる源は聖書を通して御心を示された「**あなたにあり**」、「**命の泉**」から水を汲み続ける。今年、創立百三十周年を迎えた東北学院の歩みは、この光の中で、この小さな説教集と共に、新たな十年を歩みだした。今、その幸いを心より慶びたい。

「生きる意味」

理事長・学長 松本宣郎

コリントの信徒への手紙Ⅱ 第四章七～十五節

7 とところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであつて、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。8 わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、9 虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。10 わたしたちは、いつもイエスの死を体にとつています、イエスの命がこの体に現れるために。11 わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています、死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。12 こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることになりました。13 「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持つているので、わたしたちも信じ、それだからこそ語ってもいます。14 主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと

一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。15 すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

私たちは苦労や失敗が絶えず自分にまわりつく、と思うのではないでしょうか。楽しいこと、幸せだと思う時間はすぐ終わってしまい、また新たな困難さが起こってきて苦しむのだ、と。人間のこのような気持ちを、イエスもご存じでした。「主の祈り」には、「我らを試みにあわせず、悪より救い出したまえ」とあります。つらさや痛みは試みなのだ、しかし出来ればそのような経験はしなくてすむように、神に願いなさい、ということですよ。

私たちだけではありません。イエス自身も苦しみを感じ、悩んだのです。逮捕を目前にした夜、ゲッセマネで、「イエスはひどく恐れてもだえ」、「わたしは死ぬばかりに悲しい」、と言われました（マルコ十四・三十四）。イエスはこの後間もなく捕えられ、裁判の場に引き出され、死刑を宣告されて十字架を背負わされて、丘の上で処刑されたのです。これほどに苦しく悲惨な時間を体験されたことを読むと、私たちの苦しみなど取るに足りないものに見えてくる、と言えるかも知

れません。

しかし、残念、というより悲惨、と言うべきことに、新聞やテレビその他のメディアを通じて、想像を絶する苦難に遭遇している実に多くの人たちがいることを私たちは知らされています。その苦難はしばしばそれらの人々を死に至らしめることも少なくないのです。

差別やいじめ、虐待にさらされている幼い子どもたち、貧しさのために過酷な労働を強いられているシングルマザーたち、宗派と政治の亀裂から引き起こされた戦争と暴力の犠牲となつている人々、住む国を失った難民、また大都市の中心でテロに傷つけられ、命を奪われた人々、飢えに苦しむ者、いわれのないヘイト被害にさらされているグループ、深刻な病が進行している患者、等々。

もちろんこれは現代人だけのことではなく、全歴史を通じて、人間たちが経験したことでもあります。たとえば、第二次世界大戦中、ユダヤ人たちが受けた迫害の中で、ユダヤ人精神医療学者ヴィクトール・フランクルの残した記録があります。我が国でもよく読まれています。『夜と霧』『死と愛』などがそれです。フランクル自身、ナチスのユダヤ人収容所に長く拘留されました。彼自身は生き延び、終戦後解放されたのですが、彼の妻は別の収容所で命を落としました。そして彼は収容所で過ごす間、多くのユダヤ人が極限状態の中でどのように生きてか、また死んでいったか、

を観察し、記録しました。

飢えと寒さ、拷問、動物同様の扱い、希望のない日々、人々はわずかな食物を大事にし、歯磨き粉をパンに塗って甘さを感じ、かつて過ごした楽しい日々や食事を思い出してそれで気をまぎらわします。また、かすかな解放の兆しに希望をたくして過ごします。しかし、状況は変わらず、仲間が次々に死に、あるいは殺害されてゆくのです。

人はこのような状況で生きざるを得なくなるとき、一体自分が生きることによってどんな意味があるのか、と問わざるを得なくなるでしょう。苦痛と絶望に圧倒された人間は、自ら死を選ぶ方向へと追いやられてゆくでしょう。ユダヤ人の中にもそのような人々がいました。どのような時代にも、またどのような民族の間にも、その例は見出されます。

私が想起するのは、一九〇三年、日光華嚴の滝に投身自殺した、当時十七歳の一高学生藤村操です。彼は木の幹を削って遺書めいた詩を書き残しました。当時一高で教えていた夏目漱石から彼が叱責されていたことも話題となり、社会にセンセーションを巻き起こしたのですが、要するに藤村は人生は不可解だ、と判断し、死を選んだと思われれます。

人生に意味を見出そうとし、状況がそれを不可能にした、とその人が思い込んだとき、行き着くのはニヒリズムであり、究極的には自死、ということにならざるを得ないでしょう。しかし、

そうであつてはならない、とあのフランクルが断言するのです。

フランクルはナチス敗北後、収容所の体験について語り、各地で講演を行います。その記録が『それでも人生にイエスと言う』です。この表題からうかがえるように、彼は、いかに悲惨な状況で生きることを強いられても、そのような人生に意味があるのか、と問うな、と言うのです。そもそも人生に意味のあるなしを見出そうとしてはならない。発想を転換しなくてはならない。「人生が君に何を期待しているか」、と考へよ、君には生きる責任がある、君が生きてはじめて、人生に意味が生じるのだ、と。

私たちは、フランクルを受けて、「私たちは神によつて生かされている」、だから意味がある、と言いたいと思います。いかに厳しく、つらく、絶望しかないと思えても、現に私が生きているのなら、それは神がそう命じておられるからだ、私は生きなくてはならない、ということなのです。

まさにその通りに生きようとしたのがパウロなのです。「わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない」という彼の確信には、神の子イエスが人類の罪のために死に、復活されたという、何物にも代え難い保証があることを知らなければなりません。死の恐怖にさらされているかのようなわたしであるけれども、死んだが復活して生きているイエスが私と共に生きている、だから行き

詰まらない、失望しない、滅ぼされないのです。

私たちの苦難など物の数ではない、というつもりはありません。苦しいことはない方がよい、というのもその通りです。重要なのは、私たちもまた神の力によって生きている、否むしろ、生かされていることなのです。必ず死ぬ私たちだとしても、「イエスの死を体にまとつて」いるのだから、「イエスの命がこの体に」現れていることでもあるのだ、ということなのです。

祈り…主イエス・キリストの父なる神さま、様々な苦しみを受けている人々に、できますならば安らぎを与え、あなたに生かされていることに意味を見出す信仰を与えてください。そして私たちが、イエスの死と復活による命にまとわれて生きていることを確信させてください。主の御名によって祈ります。アーメン

「お言葉どおり」

院長 佐々木 哲夫

ルカによる福音書 一章二六〜三八節

26 六か月目に天使ガブリエルは、ナザレというガラリヤの町に神から遣わされた。27 ダビデ家のヨセフという人のいいはずけであるおとめのところに遣わされたのである。そのおとめの名はマリアといった。28 天使は、彼女のところに来て言った。「おめでどう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」29 マリアはこの言葉に戸惑い、いつたいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。30 すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。31 あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。32 その子は偉大な人になり、いと高き方の子と言われる。神である主は、彼に父ダビデの王座をくださる。33 彼は永遠にヤコブの家を治め、その支配は終わることはない。」34 マリアは天使に言った。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」35 天使は答えた。「精霊があなたに降り、いと高き方の力があなたを包む。だから、生まれる子は聖なる者、神の子とよばれる。36 あなたの親類のエリザベ

トも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月げつになっている。37 神にできないことは何一つない。」38 マリアは言った。「わたしは主のはしためです。お言葉ことばどおり、この身に成りますように」そこで、天使は去って行った。

「六か月目」という書き出しで、本日の新約聖書の箇所は始まっています。「六か月目」の出来事とは、天使ガブリエルが祭司ザカリアのもとに現れて妻エリサベトの受胎を告知してから六か月後に、今度は、マリアのもとに現れて彼女の受胎を告知したという出来事です。この箇所には、もう一つ「六ヶ月」の出来事が記されています。三六節です。「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている」という記述です。六ヶ月目の頃とは、胎動が始まる時期です。のちに、マリアの挨拶を聞いたエリサベトの胎内の子が喜んで踊ったと描写されているとおり、エリサベトの受胎が本当だと自覚された時期です。旧約聖書の人物ダニエルに二度あらわれた天使ガブリエルが、この場面では、エリサベトとマリアに現れて受胎告知をしています。本日は、六ヶ月目の出来事に注目しながら、イエス・キリストの誕生について学びたいと思います。

☆

さて、最初の出来事、天使ガブリエルがマリアに現れた出来事に注目したいと思います。二八節からです。「天使は、彼女のところに来て言った。『おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。』マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ」というのです。「主があなたと共におられる」という挨拶は、旧約聖書にしばしば出てくる表現です。例えば、族長のイサクやヤコブに主が現れて「あなたと共にいる」と語りかけていますし、出エジプトの時代に、モーセやヨシヤにも同じ言葉がかけられています。ヨシヤの箇所では「あなたと共にいる」が三回も語られています。有名な箇所です。「主はヌンの子ヨシヤに命じて言われた。強く、また雄々しくあれ。あなたこそ、わたしが彼らに誓った土地にイスラエルの人々を導き入れる者である。わたしはいつもあなたと共にいる。」「一生の間、あなたの行く手に立ちただかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。」「わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うるたえではならない。おののいてはならない。あなたがどこに行つてもあなたの神、主は共にいる。」「確かに、「共にいる」が三回語られています。王や預言者も、また詩編の記者もそうでした。例えば、詩編二三篇の記者は「死の陰の谷を行くときもわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共に

いてくださる」と詠んでいるとおりです。

旧約聖書のそうそうたる人物たちに告げられた言葉「主があなたと共におられる」が、この時、マリアにも告げられたのです。マリアは戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだのは当然でした。そこでガブリエルは説明します。三〇節です。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」というのです。「主があなたと共におられる」の具体的な意味が分かった時、マリアは即座にそれを否定します。三四節です。「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに。」マリアの反論は、人間の経験に基づく理性的判断でした。そこで、天使ガブリエルは、第二の六ヶ月目の出来事を告げることになります。三六節です。「あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。」神の言葉が真実であることを担保するしとして、マリアの親戚のエリサベトが子供を確かに宿しているという事実を示したのです。しるしを突きつけられたマリアは、納得して言います。「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように。」告げられた主の言葉をマリアが信じ受け入れたので、天使ガブリエルは去って行きました。

☆☆

さて、マリアがしるしを求めた出来事は、マリアが不信仰であったことを示すものではありません。しるしを求めることは、聖書の登場人物にしばしば見られる普通のことでした。例えば、信仰の父と呼ばれたアブラハムにおいてもそうでした。アブラハムがまだアブラムと呼ばれていた時、神から祝福の言葉が与えられたのです。創世記十五章です。「見よ、主の言葉があつた。『その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。』主は彼を外に連れ出して言われた。『天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。』そして言われた。『あなたの子孫はこのようになる。』アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」アブラムには子供がいませんでしたが、「あなたの子孫は星の数ほどになる」という神の約束を信じたのです。しかし、もう一つの約束、土地を与えるとの言葉が与えられた時、アブラムは尋ねました。「わが神、主よ。この土地をわたしが継ぐことを、何によつて知ることができましようか。」しるしを求めたのです。創世記十五章には、契約のしるしとして、献げ物を真二つに切つて向かい合わせにする出来事が記されています。この出来事が由来となつて、ヘブル語では、「契約を結ぶ」ことを「契約を切る」と表現します。言葉の真实性を保証するしるしとしての契約です。いづれにせよ、マリアの態度は、ごく普通の反応だったのです。

☆☆☆

ところで、「主があなたと共におられる」しるしとしてマリアに与えられたものは、親戚エリザベトの受胎でした。この時、マリアは気がつかなかったのですが、マリア自身の受胎もまた「しるし」としての出来事だったのです。マリアの受胎をマタイ福音書は「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は、『神は我々と共におられる』という意味である」と記しています。この言葉はイザヤ書からの引用ですが、イザヤ書はメシア預言として「わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産みその名をインマヌエルと呼ぶ」と語っています。イエス・キリストの誕生がしるしであることを明示しています。

では、イエス・キリストの誕生は、何を指し示すしるしだったのでしょうか。それは、ヨハネ福音書三章十六節が証しています。「神は、その独り子をお与えになつたほかに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」イエス・キリストの誕生は、神の愛のしるし、信じるためのしるしでした。この人を見よ。まさに、イエス・キリストの生涯、すなわち、十字架と復活の生涯は、人類の歴史に与えられた神の愛の具体的なしるしでした。イエス・キリストの誕生は、私たちが「お言葉どおり、この身に成りますように」と告白する神の愛のしるしなのです。

「究極の選択」

仙台広瀬河畔教会 望月修

マタイによる福音書 第六章二四節

24 「だれも、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

人生には、様々な選択があります。生涯を決定づける重要な選択もあれば、その時々に応じて為して行く選択もあります。一度に、幾つかを選択できる場合もありますし、両天秤に掛けることで誠実さを疑われることもあります。また、人間には、為し得ない選択もあります。

ある映画での話ですが、戦時下のドイツの強制収容所に、二人の子供を抱えた母親が連行されて来ました。入所する際に、強制労働に従事させるか直ちに死を意味するガス室に送るかの選別が行われていました。既に長い行列ができていますが、選別を担当する兵士は次々と選別

をして行きます。そこでは、本来、人間がしてはならない、またさせてはならない選別がなされていたのです。二人の子供を抱えた母親の番になりました。選別を担当する兵士は、この母親に、連れている二人の子供のうち、どちらかを、ガス室に送る選択をするように命じます。そうでなければ、お前たち親子三人を皆、直ちにガス室に送る、と言うのです。母親は、錯乱します。が、やむなく選択をします。生き残った母親は、その後、数奇に満ちた生涯を歩むことになります。この時、母親が強いられた選択も、人間には為し得ない、また、させてはならない選択であります。さて、先ほど読みました、聖書の言葉です。私たちが自分の「主人」を選ぶ際に、主イエスが語られた言葉です。「だれも、二人の主人に仕えることはできない」つまり「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない」。主イエスは、そのように言われて、私たちが神に仕えようとしているのか、それとも富に仕えようとしているのかを問うておられるのです。

このように問われて、自分には「主人」などいらない、と言う人もいるかもしれませんが。自分の主人は、神でもなく、富でもなく、自分自身である、と強がることもできるでしょう。しかし、自分を支えるもの、頼ることができるとしての「神」か「富」かであります。この場合、「富」として、財産や地位、経歴や名誉を考慮することができます。その意味で、「神」か「富」かの選択は、極めて対照的であるだけでなく、人間の為し得る究極的な選択です。

しかし、そのような選択に際して、大事なことは、私たち人間は「神」と「富」とに同時に仕えることが「できない」と主イエスが告げていることです。あなたがたは、主人として、いずれか一方しか選ぶことが「できない」。実は、あなたがたはそのように造られているのだ、ということです。そこで、多くの者は、「神」でなく、「富」の方を選択しているのです。

しかし、よく考えてみますと、実際の私たちというのは、肝心なところで迷い始め、結局はどっちつかずの選択をしているのではないのでしょうか。例えば、日頃は「富」に依存しているけれども、困って来ると「神」に助けを願う。あるいは、その逆に、取り立てて困らない時には「神」を信じてもよいと思っているけれども、いざ困ったことが起こると「富」に依り頼む……。そういう具合です。

私たちの人生の、そして私たちの住む世界の混乱の多くは、この両者に、どっちつかずの姿勢でいるところから生じている、と言つてよいではありません。あるいは、同時に仕えようとしているところにあるのではないのでしょうか。つまり、主イエスの言われる「できない」ことを、あえてしているのであります。主イエスは、それは「いけない」と言われるではありません。そうではなくて、あなたがたは、両方を選択することが「できない」存在であるのに、あえてしようとしているから問題なのだ、と指摘しておられるのです。

そこで、このことをめぐって、主イエスは、続く二五節以下に、皆さんもよく知っている、有名な説教をしています。「空の鳥をよく見なさい」。また、「野の花がどのように育つのか、注意して見なさい」。自然を題材に取り上げて、神への信仰へと私たちを招いています。「鳥は、種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。また、野の花は、働きもせず、紡ぎもしない。……今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる」。私たちは、鳥よりも価値があり、野の花以上に神から顧みられています。だから、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」と勧めています。

つまり、「神」と「富」の、どちらか一方にしか仕えることができないのだから、あなたがたは、「神」を主人にしたらよい。あなたがたがいつのまにか依り頼んでいる「富」も、実は、神の支配のもとにあり、神に仕えるところで用いられるべきものなのだ、と仰せになつて居るのです。それを、詩情豊かな譬えをもって、私たちに勧められておられるのです。

いろいろな選択があるにせよ、究極的な選択は、まず、「神の国」つまり、神の支配を仰ぎ求め、「神の義」つまり、キリストによる救いを求めることです。それは、私たちにできる選択です。そして、この選択さえできれば、あとのものは「みな加えて与えられる」つまり、神の見守りと養

いとを受けることができるのだ、と仰せになつて居るのです。賭けにも似た選択かもしれません。しかし、この選択さえできれば、たとえ他の選択に失敗しても悔いることはありません。何故なら、私たちの主人となられた神は、私たちの失敗さえ用いてくださり、私たちの救われるために役立たせてくださることがおできになるからであります。このような神を神とする。それが、私たちが幸いな人生を歩む秘訣であります。

旧約聖書の信仰の詩人も、このように歌っています。「助けを求めてあなたに叫び、救い出されあなたに依り頼んで、裏切られたことはない。」(詩編二二・六)

父なる神。

爽やかな朝、こうして、一時、日常的な営みから離れて、共に神の言葉を聞く時を与えられました。幸いを感謝いたします。すぐにでもしなければならぬ選択、先送りしている選択があります。思い悩みます。そのような私たちに、御子イエス・キリストにおいて、永遠なるあなたが語り掛けてくださっていますことに慰められ、励まされ、そして希望を与えられます。それ故に、私たちは、言い表すことができます。「まず、神の国と神の義を求めることができます」と。

この祈りを、私たちの主イエス・キリストの御名によって、祈ります。アーメン

「わたしの母、わたしの兄弟」

宮城野愛泉教会 橋 爪 忠 夫

マタイによる福音書 第二二章四六〜五〇節

46 イエスがなお群衆ぐんしゆうに話はなしておられるとき、その母ははと兄弟きょうだいたちが、話はなしたいことがあつて外そとに立たつていた。47 そこで、ある人ひとがイエスに、「御覧ごらんなさい。母上ははうえと御兄弟ごきょうだいたちが、お話しはなしたいと外そとに立たつておられます」と言いつた。48 しかし、イエスはその人ひとにお答こたえになつた。「わたしの母ははとはだれか。わたしの兄弟きょうだいとはだれか。」49 そして、弟子でしたちの方ほうを指さして言いわれた。「見みなさい。ここにわたしの母はは、わたしの兄弟きょうだいがいる。50 だれでも、わたしの天てんの父ちちの御心みこころを行おこなう人ひとが、わたしの兄弟きょうだい、姉妹しまい、また母ははである。」

皆さんにこういう経験があるでしょうか。今、読みました聖書箇所の場合を想像してもらいたいので、振り返ってみていただきたいからです。皆さんが、家からどこかに出掛けて行つた。

の出掛けた先に、皆さんの家の人々、父、母と兄弟全員、全家族が掛けつけて来た。もしそういう経験がありましたら、それがどういうとき、どういう場面であるか、すぐおわかりになるでしょう。それは皆さんの身に何か一大事が起こった、何か出先でよくないことが起こったという場合ではないでしょうか。そういう場面を思い出し、あるいは想像していただくと、ほぼそれに近いのが、今読みました聖書箇所 の 場面です。

「イエスがなお群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちが、話したいことがあって、外に立っていた。」(四六節)——というあまり緊張感を感じられません、実際はそうではないらしいのです。すでに主イエスは父ヨセフを亡くしていましたから、ここにある母と兄弟たちとは、主イエスの全家族という意味です。その全家族が、主イエスの話しているところにやって来た。それはただならぬことでしょう。どうして全家族、母、兄弟たちが打ち揃ってイエスの出先にやって来たのか。このマタイ福音書を見ますと、その理由らしきものが書かれています。少し前の一四節に「ファリサイ派の人々出て行き、どのようにしてイエスを殺そうかと相談した。」とあります。これは、当時のユダヤ社会の中で、旧約以来の律法、ことに安息日の掟を厳守するファリサイ派の主張を主イエスが言葉と業で、ひっくり返してしまつた。それ以降、このユダヤ社会のリーダー的集団とイエスとの衝突は激しさを増して行きます。彼らはイエスを「殺そう」とま

で決意しました。それはただならぬことでしょう。多分、この噂を聞きつけた家族は心配でたまらなかつたことでしょう。「息子が危ない、このままにしていたら、ファリサイ派の人々に殺されるかもしれない」。そこで相当に心配顔で掛けつけて来たのではないのでしょうか。

それに対して、主イエスはどうかだつたのでしょうか。四七節に「そこで、ある人がイエスに、『覧なさい。母上と御兄弟たちが、お話ししたいと外に立つておられます』と主イエスに取り次いだ。それに対する主イエスの答えは、大方の予想をはるかに越える驚くべき返事です。四八節にイエスはこうお答えになりました。「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか。」と。最初に皆さんに、これに似た場面での経験を思い出していただきました。皆さんだつたら、こんな応え方をするでしょうか。多分、違つてでしょう。「ああ、よく来てくれた、心配かけて済まなかつた」というような答え方をするのではないのでしょうか。しかし違います。イエスの一声は「わたしの母とはだれか。わたしの兄弟とはだれか」です。この答えをどう理解したらよいのでしょうか。聖書の註解書の中には、血を分けた肉親に対する情の欠けた、冷たい言葉だという印象を紹介している文章もあります。しかし主イエスが、モーセの十戒にある、「あなたの父母を敬え」との戒めを軽んじているとは思えません。そうではなく、きつと主イエスには普通の人とは違う、神の子である主イエスにしかわからないこと、そしてまた自分の母、兄弟が目の前にいるからこそ、はつ

きりさせたかったことがおありになつたのではないでしようか。

それは次の言葉にうかがわれます。四九節に「そして、弟子たちの方を指して言われた。『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでも、わたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である。』」これが主イエスのこの場面で示したいこと、一般の人々と見方が違ふところです。ご自分がフアリサイ派の人々の謀略によつて殺されるかもしれないという危険を十分に知りながら、そのようなご自分の身の危険以上に、大切なことがあつたのです。そしてその大切なこととは、この場面、つまりご自分の血を分けた母親、そして兄弟がいる前でこそ、明らかにしなければならなかつたことでした。それは何か、わたしの天の父の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、わたしの母だということです。天の父の御心を行う人——まさに主イエスこそ、それにご自分を掛けていました。この天の父の御心こそ、また主イエスの心としたことです。それは旧約・新約聖書を貫く、一貫して変わらないものです。それは、神に背き、天の父から離れてしまつた人々をもう一度、天の父のもとに引き戻すことです。もう一度、神と人とのつながり、交わり、それを取り戻すことでしょう。旧約には繰り返し、神が「あなたはわたしの民となり、わたしはあなたの神となる」という神と人との契約を表す言葉が出て来ます。そして主イエスはそれを「神の国」と表現しました。そこに神と招かれた人々が共にいるところ

という意味です。人の思いや、人情よりも、天の父の人々に対する本当の御心、人に差し出された救いの御心を優先し、何よりも、人々に焼きつけるような仕方です。示したかったのでしょうか。「弟子たちを指して、ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる」と言われた。何と印象深い言葉ではないでしょうか。教会では、この主イエスの言葉に従って、互いに兄弟、姉妹と呼ぶようになりました。

主よ、わたしたちを、わたしたちの父の御心をわかるものとし、またわたしたちの父の御心を行うものとして下さい。

「聖なる夜」

仙台五橋教会

宮川 経宣

ルカによる福音書 二章十二節

「¹²あなたがたは、布にくるまって飼^かい葉桶^{ばおけ}の中^{なか}に寝^ねている乳飲^{ちの}み子^ごを見^みつけであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

御子イエス・キリストの誕生は、ルカ福音書二章の羊飼いたちに、御子の誕生を伝える天使の言葉によれば「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼^かい葉桶^{ばおけ}の中^{なか}に寝^ねている乳飲^{ちの}み子^ごを見^みつけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」と記されています。つまり、この世で最も貧しくされた神の御子は、家畜小屋で生まれ、飼^かい葉桶^{ばおけ}の中^{なか}に寝^ねかされた、この上なく貧しい誕生であつたと伝えていきます。

しかし、ルカによる福音書二章八〜二〇節を黙想しながら、疑問に思うことがあります。それ

は、羊飼いたちは、この天使の言葉を聞いて、果たしてどこへ行つて、乳飲み子を探し当てたのか、またどうして、天使が告げる「大きな喜び」を探し当てることができたのか、と思うのです。

ベツレヘム近くの野原で、野宿しながら夜通じ羊の群れの番をしていた羊飼いたちに、天使から救い主誕生の知らせがありました。その救い主は、「布にくるまって飼ひ葉桶に寝ている」（十二節）と言います。それを聞いて羊飼いたちは、急いで探しに出かけたのですが、さて、一体彼らはどこに探しに行けば見つかると思つたのでしょうか。救い主は「飼ひ葉桶に寝ている」と言うのですから、そこから推測できるのは家畜小屋です。では、家畜小屋はどこにあつたのでしょうか。そこで、もしかしたら私たちは、野原で野宿していた羊飼いたちが町に向かい、家の裏側に付属している馬小屋や牛小屋のような場所を一軒一軒訪ね歩きながら、遂に飼ひ葉桶の乳飲み子を探し当てる羊飼いたちの姿を思い浮かべるかも知れません。

けれども、当時の家畜小屋は、家のとなりに建てられた木製の小屋ではなくて、郊外の丘のような場所にある洞穴だつたと言われています。そこで推察されるのは、その洞穴は、他人の馬小屋でも家畜小屋でもなく、羊飼ひ自身が自分の飼つている羊を囲ひ、休ませるための家畜小屋だつたのではないだろうか、ということです。つまり、野原から羊を休ませるために洞穴に帰つてきたら、中に見知らぬ若い夫婦がいて、しかも飼ひ葉桶の中には生まれたばかりの乳飲み子が寝か

されていたという驚くべき光景だったのでないかと想像されるのです。

今までは、羊飼いたちは、救い主がいる家畜小屋を一軒一軒探し歩いたのであるかと思つていました。しかし、羊飼いたちは、「飼い葉桶に寝ている乳飲み子」を、わざわざ探しに行ったのではなく、羊を放牧し、野宿し、そこで天使の言葉を聞いて、羊を休ませるためにベツレヘムの自分たちの家畜小屋に戻つて来ると、何とそこに乳飲み子主イエスを探し当てることができたという驚くべき出来事が待つていたと考えられるのです。

事実、現在、キリストが生まれたとされるところに降誕教会があります、それはキリストが生まれたと伝承される洞窟の上に建てられたものです。そしてこの降誕教会から近くのところ、「羊飼いの野」教会というものがあります。ですから、たとえ探しに行ったとしても、自分たちの生活圏の中にある近くの洞窟を見て回つたほどのものであらうと考えられるのです。

そこから天使が告げる真の救いや喜びというものは、何か特別な生活や人生の場所を探し当てるものではなく、むしろ私たちが、自分自身の生活の中で探し当てるものだとすることを、示されていると考えられるのです。すなわち真の救いや喜びというものは、私たちの日常の生活のただ中に、当たり前前に過ごしていると気づかないようなものとして、そこに隠されているというものではないでしょうか。

だとするれば、どうして羊飼いたちは、それが救い主であると、喜びであると気づくことが、探し当てることができたのでしょうか。それは、何より天使の御告げがあったからです。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」この御言葉こそ、羊飼いたちは、日常生活の中の一場面、一つの出来事の中にある大きな救い、大きな喜びに気づくことが出来た、不思議なしるしを探し当てることのできたのではないのでしょうか。そこからローマ人へ手紙十章八節の「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある」という聖書の御言葉があることを思います。

約二千年前のクリスマスに、神さまは天使を通して、救い主の誕生を羊飼いたちに語りかけました。イブの夜、目に見える天使が現れ、私たちに神の御告げを語ってくださいるかどうかわかりません。けれども、神は「何か」を通して私たちにいつも語りかけています。その最たるものが聖書の御言葉なのではないのでしょうか。そして今、聖書は私たちに對して、あなたにも救い主が生まれる。あなたにも救いを探し当てることのできる。あなたも救いを見る、と。それが、聖書を通して私たちに与えられた神の救いの約束なのです。

この神の約束が、その言葉通りに実現するのを私たちが見るとき、実感するとき、私たちは心

から神を崇め、神を賛美することができのです。では私たちは、約束の救いをどこで見られるのでしょうか？それは自分が期待し思っていたところではなく、自分が願っていたところでもなく、むしろ自分が思いもしなかったところに、自分が願いもしなかった現実の中に、真の救いが実現していることを見るようになるでしょう。それが救いのしるしなのです。

イエス・キリストは神の御子でありながら、神の子に全くふさわしくないとところを誕生の場とされました。王の宮殿でも、人の家でもなく、最も貧しく、みすばらしい洞穴の家畜小屋で、最も弱い乳飲み子として生まれます。それは、全く期待や願い通りにならない私たちの日常生活や苦悩の人生を歩む私たちに、御言葉を与え、その私たちのままならない人生や生活を十分に知り、理解し、共にいて励まし、支えるために、神の御子が弱い人間の姿とられたという意味なのです。

〔祈り〕

独り子なるイエス・キリストをこの世に降し、私たちの救い主として、遣わそうとされる父なる神よ、あなたの愛とその深い恵みに心から感謝をささげ、あなたの大いなる聖名を崇めます。今日、あなたから特別な愛の賜物、私たちの救い主イエス・キリストの誕生が知らされ、神様、あなたが私たち一人一人の生活とその人生において、どのような時でも、私たちの心に寄り添い、

相応しい支えと助けをし、日々の疲れとその傷を癒し、罪を背負い、赦してくださる事を約束されました。そしてその約束と救いは、いつも御言葉をもつて、私たちの近くにあることを教えられました。本当に私たちがいつもあなたに愛され、大切に必要に思い、憐みに満ちた救いを与え満ちそうとされている真の幸せを思い知ることができました。

愛の主よ、このクリスマススの愛と救いの出来事が、この暗く冷たい現実、闇と争い多いこの世界にあつて、真の光と救いで照らされ、主イエスの誕生が、どうか、全ての人々の心の闇に、平和と喜びと希望の一筋の光として灯ることができますように。今、特に心に深い傷を負い、痛みと苦悩を抱える者、絶望と困難に耐えている者、また不安と恐れを覚える者に、どうぞ御言葉の光と真の救いへの導きを注ぎ、この闇の中でも光輝く、幼子イエスに出会う時を与え、主にある温かい交わりの時を備えてください。これらの祈りを主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

「まことの光」

石巻山城町教会

関川祐一郎

ヨハネによる福音書 第一章一―一三節

1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。2 この言は、初めに神と共にあった。3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらず成ったものは何一つなかった。4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするために、またすべての人が彼によって信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9 その光は、まことの光で、世に来たすべての人を照らすのである。10 言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。11 言は自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。12 しかし、言は、

自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。¹³ この人々は、血によってではなく、肉の欲によってではなく、人の欲によってでもなく、神によって生まれたのである。

聖書はしばしば神さまからのラブレターと言われます。その理由は、神さまがわたしたち人間をどれほど愛しておられるのか、この神さまの愛が一貫して語られているからです。聖書に綴られる一つ一つの言葉は、神さまがわたしたちに語りかけてくださっている言葉です。その言葉は時にわたしたちを励まし、時にわたしたちの心を打ち砕きます。しかし、そのいずれの言葉も神さまがわたしたちを愛するがゆえに、語られる言葉であるのです。わたしたちに関心を寄せ続けてくださり、どこまでもわたしたちと関わりを持つようとしてくださる、それが聖書の証する神さまの姿です。神さまの愛は永遠です。わたしたちのそれとは異なり、中途半端なものではありません。神さまがわたしたちを愛すると決意してくださった以上、徹底的にわたしたちを愛し抜いてくださるのです。神さまがわたしたちを愛して下さっている、この愛は神さまが愛する独り子であるイエス・キリストを与えてくださった、この出来事の中に究極的に表されています。聖書は主イエスが「光」としてわたしたちのもとに来てくださったと語っています。特に今日与え

られた聖書、ヨハネによる福音書一章〇節には次のように記されています。

「その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである」

ヨハネ福音書がはつきりと語っているように、この世界とわたしたち一人一人を照らす「まことの光」としてイエス・キリストはこの世に到来してくださいました。

では、光とはわたしたちにとってどのようなものでしょうか。光は暗闇の中でわたしたちの足もと、そしてわたしたちの歩みを照らす道しるべとなります。暗い夜道、光が無ければわたしたちは道をさまよい、目的地にたどり着くことはできません。またわたしたちが暗闇の中で恐怖や不安を覚えるとき、そこに差し込む光はわたしたちに安心を与え、希望を与えます。▲年前東日本大震災が起こった時、わたしが暮らしている石巻は街の明かりが消え、夜になると真っ暗闇でした。夜道に時おり通る車のライトだけが異様に明るく何かを照らしていました。震災後しばらく経つてようやく街の街灯に明かりが灯ったとき、何とも言えない安堵感に包まれたことを思い出します。わたしたちが暗闇の中に置かれるとき、そこに光があるのとないのとはその安心感とは全く違うものです。そしてわたしたちは、闇の中にあつて何とか光を見出したい、希望を見出したいと願うものなのです。わたしたちは潜在的に光を求める存在であると言ってもよいでしょう。

またわたしたちが光のそばに近づくと、光が発する熱はほのかにわたしたちを暖めてくれます。さらに光はわたしたち自身をも照らし、輝かせ、わたしたちの存在をはっきりと示してくれます。わたしたちは自分で光を発することはできません。光が照らしてくれなければ、わたしたちは輝くことはできませんし、光に照らされていなければ他人を認識することもできないのです。光がなければ自分が何者なのか、その存在を示すことができないのです。このように、光が無ければわたしたちはこの世界で生きることのできない存在です。

神さまは天地創造の最初に「光あれ」と語り、この世界に光を造ってくださいました。このことの中にもわたしたちにとって「光」というものがいかに重要であり、生きる上で欠かすことのできないものであるかが示されています。光は神さまご自身がわたしたちに与えてくださった大いなる賜物なのです。

光についてこのように考える時、イエス・キリストがわたしたちにとってまことの光であるとはどういうことなのでしょう。それは、イエス・キリストこそわたしたちの歩みを照らす光であり、闇の中であって平安と希望を与えてくださるお方であるということです。さらにはわたしたちが弱っているとき、苦しみや悲しみに押しつぶされそうになって震えている時、そのわたしたちを優しく包んでため、慰めと癒しを与えてくださるお方なのです。そして何よりも、罪

という闇に覆われていたわたしたちを、イエス・キリストというまことの光によって照らしてくださる存在なのです。イエス・キリストというまことの光であられるお方が、罪の闇に陥っていたわたしたちを再び神さまの御前に輝かせてくださったのです。このわたしたちにとってかけがえのないお方が今から約二千年前にベツレヘムという小さな町の片隅に、貧しい赤ん坊の姿で生まれになりました。この喜びと大いなる恵みがクリスマスマスの出来事です。

イエス・キリストの誕生はわたしたちが神さまの御前に豊かに生きるために、無くてはならないものでありました。それはキリストの到来、十字架の死と復活によって、わたしたちの罪が赦され、罪からの救いが成し遂げられたからです。イエス・キリストがわたしたちのためにすべての罪を背負ってください、この主イエスの十字架の犠牲、そして復活によってわたしたちはキリストの復活の命、永遠の命を受け継ぐ者とされたのです。

イエス・キリストは今なお「まことの光」としてわたしたちを照らし続けてくださっています。進むべき道に迷っている時にはわたしたちの進むべき道を照らし、わたしたちが苦しみや悲しみの中にあり弱っている時にはわたしたちをその背中に背負い、励まし強め慰めを与えてくださいます。わたしたちが自分の存在に自身が持てない時、わたしたち自身を照らし、神さまの御前に生きるわたしたちの存在意義をも示してくださいなのです。わたしたちが暗闇の中で決して迷う

ことのないように、いつも共にいてくださる、それがまことの光としてのイエス・キリストです。まことの光としてのイエス・キリストはわたしたちから遠く離れたはるか彼方から、わたしたちを小さく照らす光ではありません。わたしたちのただ中で、わたしたちに最も近い場所でわたしたちを照らしてくださるのであります。最も低きに降ってくださって、わたしたちに仕え、わたしたちを照らしてくださる、これがまことの光であり、わたしたちのまことの救い主の姿なのです。

神さまがわたしたちに望んでおられることは、神さまが最高のプレゼントとして与えてくださったイエス・キリストをわたしたちが「まことの光」として受け止め、すべてをこのお方に委ねて、わたしたち自身を明け渡して歩んでいくことです。このことの中にこそ、真の幸福と平安、そして喜びがあると聖書は語るのです。

「もう泣かなくともよい」

東北学院中学校・高等学校 宗教主任 松井浩樹

ルカによる福音書 第七章一節～一七節

11 それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。12 イエスが町の門に近づかれると、ちようど、ある母親の一人息子が死んで、棺が担ぎ出されるところだった。その母親はやもめであつて、町の人が大勢そばに付き添つていた。13 主はこの母親を見て、憐れに思い、「もう泣かなくてもよい」と言われた。14 して近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった。イエスは、「若者よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。15 すると、死人は起き上がったものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになつた。16 人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民の心にかけてくださった」と言つた。17 イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まつた。

今日は、「ナインのやもめ」というルカ福音書にのみ記されている物語です。「やもめ」という言葉が出てまいります。聞きなれない言葉ですが、要するに、配偶者である夫が何かしらの事情で亡くなって母親と子供だけで生活しなければならなくなった。そういう状況にあったことを「やもめ」と呼んだようであります。逆の場合、父と子どもの場合には「男やもめ」という呼び方もあります。そして、残された一人息子とひっそりと過ごしていた、そういう女性の物語なのです。今、ひっそりと生活をしていたといいましたが、かなり厳しい状況であったといわれています。

というのは、当時の社会では十分な社会保障がなかったからです。そればかりか、何かしらの理由があるから、たとえば先祖が何か悪いことをやったから、であるとかいやこの女性自身に何か問題があったからその報いがあらわれているのではないかといったような、どちらかという助けるというよりはむしろ、白い目で見られる立場にあった……だからひっそりと、目立たぬよう、生活をしていたというわけです。しかし、事はそれだけでは終わらず、その一緒にひっそりと生活をしていた息子までも、何かしらの理由で亡くなった……そういう悲しみの極みのような状況の物語であるということをまず、おさえておきたいと思えます。

そこに主イエスが、通りかかるのです。一三節には、主イエスも彼女を見て「かわいそうに思い、「泣かなくともよい」と言われたのです。そこで主イエスは、その亡くなった一人息子をよみがえらせた。という形で物語は終わっています。

ただ、良く考えますと、この主イエスによってよみがえった息子も、また亡くなったのです。主イエスによって仮に、よみがえったからと言って二千年たった今も生き続けているというのではないのです。やはり、やがていつかはまた、死んだのです。ですから、今日のこの物語の中心は、「死人が主イエスによってよみがえった」ことを伝えようとしているのではないといえるのです。したがって今日のこの記事の中心的テーマは、死による悲劇という、私たちにとつての最大の問題を取り上げているのです。すべての人はたしかに必ず死をむかえます。しかも、その死にも様々なケースがあることも事実であります。愛する人たちに囲まれ、看取られて天寿を全うする死と、突然の災害や事故によって若者が命を失うのと同じ死とは思えません。高齢者の孤独死、戦場における若者の犠牲死。あるいは貧困による幼児の餓死や病死のケースも大いに考えさせられるところであります。いずれにしても、死の本質は、関係の喪失だと言われます。すべての関係が断たれるゆえに、悲しいのであります。そうするならば、今日のナインの女性の悲劇は、引き裂かれてしまった息子との関係性であるのです。そこでこの物語は「イエスは息子をその母にお返

しになった」、という言葉で結ばれている。つまり一旦、引き裂かれた関係は主イエスによって回復された、とこの物語は結ぶのであります。

そこで主イエスの言動に注目したいと思います。それはこの物語ではこの女性もまた周囲の人たちも、一言も「癒してください」とか「生き返らせてください」という言葉を発していない。また、主イエスの方からも「信じなさい」という言葉すらも発せられていません。何もお願いも頼みもされていないのに、「泣くな」と宣言をされた。女性は何も反応をしていないのにも関わらず、無言で棺に近づき触って、若者を生き返らせるのです。ここでは「信じるならば」とか、イエスに願うという言葉や行為が全くないところの出来事であります。

つまり「泣くな」という言葉は、それを必要とする、今泣いているすべての人に無償で与えられていると、読みとることが出来る言葉であるのです。そこで主イエスはまず、やもめの女性を見て「憐れに思った」とあります。この「憐れに思う」という言葉は、実は聖書の中で、福音書でしか見られない言葉であり主イエスがかなり、そうとう深く哀れまれたという時にしか用いられない言葉なのです。もう少し、具体的にいますと主イエスが、その夫に続いて一人息子にも先立たれた、世間の目も厳しい、生活するあてもない、生きる希望さえも失ったこの女性を見て主イエスは、内臓がねじれるくらいの深い憐れみと同情を覚えられて、思わず口からほとばしった

言葉が「憐れに思い、「もう泣かなくともよい」と続いたというのであります。

数日前の日曜日で、震災から四年と七ヶ月がたちました。宮城県の中だけでも、震災関連死を含めて、一万五四二人の方が亡くなりました。少し減少したとはいえ二二三九人の方々がいまなお、行方が分かりません。大きな目で周りを見ると、遅ればせながら復興住宅も立ち並んできました。壊れた防潮堤も、概ね海岸線を覆うことができてきたようであります。しかし小さな目で見ると、仮設住宅を出た後の生活不安、コミュニティの再結成、とりわけしばらくの様々な我慢を強いられた子どもたちのメンタルな部分を思いますと心を痛めますし、また実際の亡くなった方々、行方不明の方々を思いますと改めて私たち、与えられている今を懸命に生きなければならぬと感じるのです。そして真の復興を心に留める、願うことを止めてはならないと強く思うのであります。

今日の物語、ただ一つ確かなことは、聖書の神は、私たちを悲しみで終わらせるようなお方ではないということに尽きると思うのです。今日の物語の最後に主イエスはこう言われています。「若者よあなたに言う。起きなさい。」四月の始業、新しい年の始まりに、それぞれが胸に誓ったことがあるかと思えます。私たちはたとえ倒れかけても、倒れそうになつたとしても常に、起き続けたいと思います。主イエスの深い憐れみと、起きなさいという励ましを今一度、心にとどめた

いと思うのです。

祈り、主イエスの父なる神様。

今日も恵おおき、命を与えられましたことを感謝いたします。若者よあなたに言う。起きなさい、との御言葉をいただきました。ここに集う一人ひとりを祝福の内においてください。主の御名によつて祈ります。アーメン。

「主よ、わたしたちを憐れんでください」

東北学院榴ヶ岡高等学校 宗教主任 西間木 順

マタイによる福音書 九章二七節～三二節

27 イエスがそこからお出かけになると、二人の盲人が叫んで、「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と言いながらついて来た。28 イエスが家に入ると、盲人たちがそばに寄って来たので、「わたしにできると信じるのか」と言われた。二人は、「はい、主よ」と言った。29 そこで、イエスが二人の目に触り、「あなたがたの信じているとおりになるように」と言われると、30 二人は目が見えるようになった。イエスは、「このことはだれにも知らせてはいけない」と彼らに厳しくお命じになった。31 しかし、二人は外へ出ると、その地方一帯にイエスのことを言い広めた。

ある漫画の中で、こんな場面がありました。冬に着用するような厚手の手袋をはめて、洋服のボタンを留められるか、という場面であります。みなさんは、できるでしょうか。うまくできなくて、いらいらしてしまうかもしれません。できるのが当たり前だと思つていきますと、なかなかうまくできない人の立場になつて考えることは難しいことではないかと思ひます。

今日は、二人の目の見えない人が登場してきます。当時は目が見えない、それは罪を犯したからだと思われていた時代であります。周りにいる人たちは、その人たちの立場にたつことはありませんでした。またその人たちの苦しみを理解しようとはしなかつたのであります。誰がこの苦しみを理解してくださるのか。そのような心の中で叫んでいたのではないかと思ひます。

主イエスがお出かけになると、二人の目の見えない人が、「ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだのであります。おそらく、主イエスがお通りになつてゐることを周りの人が話をしてゐる声を聞いたのでしよう。

憐れむとはどのような意味なのでしょう。遠くから、苦しんでいる人、悲しんでいる人、病氣の人を見て、「なんてかわいそうなんだ」と思ふことでしょうか。そうではありません。苦しんでいる人、悲しんでいる人、病氣の人のそばにいて、その人たちの苦しみを自分のことをして感じることであります。主イエスのご生涯は、そのような人たちの中に入つて行かれた、その

ような人たちの苦しみなどをご自分のものとされたと言えます。

主イエスは、おそらくこの二人の目の見えない人が、どのような苦しみにあるのか、そしてどうしてほしいのかを、すでにご存じだったのであります。ですから、「わたしにできると信じるか」と言われたのであります。彼らは、「信じます」と答えたのであります。彼らは心から主イエスを信じたのであります。主イエスは彼らの目に触れ、目が見えるようになったのであります。

目が見える、それには2つの意味があると思います。一つは文字通り、肉体の目が見えるようになったことでもあります。もう一つは、心の目が開かれ、大切なことが見えるようになることになったと云うことでもあります。星の王子さまという本の中で、「ものごとはね、心で見なくてはよく見えない。いちばんたいせつなことは、目に見えない」と書かれてあります。

私たちが生きていく上で本当に大切なことは、肉体の目で見える事はできません。見えているかわかる、というものではありません。そうではなくて、心の目を通して、初めて大切なことが見える、わかるようになるのであります。

実は私たちの心は、盲目であると言えます。ですから今日の二人の目の見えない人のように、「主よ、私たちが憐れんでください」と求めるのであります。主イエスが、聖霊を私たちの中に送ってください、心の目が開かれ、本当に大切なことが見えるようになるのであります。使徒パウロ

は、「わたしたちは見えるものではなく、見えないものを注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」と言っているのです。

〈祈り〉

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校に招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え、共に礼拝を捧げることができまことを感謝いたします。

私たちの心は盲目となっています。どうぞ私たちを憐れんでください。心の中に聖霊を送ってください。私たちの心の目が見えるようにしてください。

この祈り 尊い我らの主 イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

「創造は歓び」

宗教部長 野村 信

創世記 第一章三十一節

31 かみ神はお造りつくになつたすべてのものを御覧ごらんになつた。見よ、それは極めて良よかつた。夕べゆうがあり、朝あさがあつた。第六だいの日ひである。

二〇世紀前半のフランスを代表する哲学者と言われているアンリ・ベルクソンが、次のように言っている言葉はとても大切であると思います。

歓びのあるところにはいつも創造があり、

創造が豊かであればあるほど歓びは深くなる。

私たちが、楽しいとか、うれしいといって、喜びを感じるのは、いつも新しく創られ、産み出

されたものから生じます。人が新しいものを創り、産み出していけばいくほど、そこから湧いてくる喜びは大きく、深い、ということです。

歓びのあるところにはいつも創造があり、

創造が豊かであればあるほど歓びは深くなる、と。

最近翻訳されて出版された『精神のエネルギー』という本の中にある言葉です。

なるほど、みなさんは、漫才とかお笑いなどを見たり、聞いたりすることはあると思いますが、新しいネタや笑い話を聞くと、みんな大笑いするわけです。しかし話し手が同じことを何回か繰り返すと、もはや面白味はなくなってしまう。だからお笑いタレントはいつも新しい展開、おち、笑いを懸命に探しています。そこで、もし全く新しいスタイルを見つけることが出来ると、再び大うけするわけです。

歓びは新しく創造されたところに生まれるからです。

何か料理を作ったことのある人はいると思いますが、初めてレシピに沿って料理を作り、それを食べてみると、思ったよりも「おいしい」。すると嬉しいですね。自分にとって初めてのことは、

実現すると嬉しいものです。さらに食材をいろいろ組み合わせ、まったく新しい、いわば創作料理を作り、それがおいしければ、その喜びはもつと大きくなります。その人はいずれ料理研究家になるかもしれません。

ベルクソンは、子供を産んだお母さんには、新しい命を地上に誕生させた、という喜びがあふれていると言います。起業して新しい会社を設立したビジネスマンは事業が広がっていく喜びを味わっていると言います。さらに自分の考えを実現した芸術家や、発明、発見する科学者には特別の喜びがある、と言います。どんな領域においても、新しいことを発見したり、産み出すところには喜びがあり、それはまさに創造の喜びであって、その人の感じている喜びは神のような喜びである、と語っています。

本日選びました聖書の御言葉は、創世記の天地創造の第六の日の最後の部分ですが、そこに「見よ、それは極めて良かった」という言葉が出てきます。みなさんは、創世記の最初をすでに何度目にも目にはしていると思いますので、解説する必要はないと思いますが、神は第一の日から第六の日まで順に天地を創造されていくたびに、これを見て良しとされたのです。しかも第六の日には、極めて良かったと、最上級の言葉がついています。この「極めて良い」という言葉は、ヘブライ語で、トープ・メオッド、と言います。トープとは、英語の good であり、良いという意味ですが、

喜ばしいとも訳せません。しかも、メオッドは、非常にという意味ですから、非常に喜ばしかった、満足された、と訳すことができます。

つまり、神はあたかも一日一日、新しい世界を創るたびに、喜びに満ちた、と読めます。まるで、ベルクソンは、この聖書の言葉から、「歓びのあるところにはいつも創造があり、創造が豊かであればあるほど歓びは深くなる」という言葉を思いついたのかもしれない。ベルクソンは、ユダヤ教徒でしたが、晩年にキリスト教に近づいたともいわれています。いずれにしても、創世記第一章に関連する言葉であると思います。

それにしても、私たちは、新しく創り出し、新しく産み出すところに歓びがあるということを感じたいと思います。神が世界を創造していく中で一日一日と、喜んでおられたのなら、神に似せて創られた私たちも、同様に、何か新しく創る、新しく産み出していくたびに歓びが生じるのは当然です。

確かに、私たちは、今はお笑い芸人にはなれないかもしれませんが。料理研究家になるにはまだ経験が不足しています。大部分の人はまだ子供を育てるには早いでしょう。起業して会社を建てるにはあまりに世間を知らなさ過ぎますし、資金もありません。芸術家になるにはまだ相当努力が必要です。科学者になったり、発明家になるには基礎力が不足しています。

しかし、私たちは、今日という一日の中で、新しい一歩、新しい何かを生み出すことはできません。それが小さな一歩で、取るに足らないささいなことでも、私が新しく何かを創り、何かを生み出すことはできません。将来に夢や目標を描いて、それに向かって、一歩一歩前進することによって、喜びが生まれ、良かったと感謝できるからです。神も、この世界を創造するにあたって、おそらく大きな青写真を描き、それに向かって少しずつ世界を創り、そのたびに、一日一日、喜び、満足されたのです。

本日、私たちは、「歓びのあるところにはいつも創造があり、創造が豊かであればあるほど歓びは深くなる」と言う言葉を、創世記の最初の言葉と重ね合わせて聞きました。

そこで、私たちにとって何を生み出したらよいのか、そのために何をしたらよいのかを明確にしましょう。自分で考えて、その目標を目指して一歩一歩進んでいく時、小さな喜びが生まれ、いずれ大きな歓びに満たされるということをここから学び、一人一人の生きる喜びにしているほしいと思います。

「結婚を祝福する神」 「カナの婚礼」

大学宗教授任 原 田 浩 司

ヨハネによる福音書 第二章一〜一一節

一三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があつて、イエスの母がそこにいた。² イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。³ ぶどう酒が足りなくなつたので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくりました」と言つた。⁴ イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」⁵ しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言つた。⁶ そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあつた。いずれも二ないし三メトレス入りのものである。⁷ イエスが「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。⁸ イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持つて行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行つた。⁹ 世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知つて

いたが、世話役は知らなかったの、花婿を呼んで、10言った。「だれでも初めに良いぶど
う酒を出し、酔いがまわったところに劣ったものを出すのですが、あなたはよいぶどう酒を
今まで取って置かれました。」ロイエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、
その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。

二〇一五年の秋のある日曜日の午後、東北学院大学の卒業生が土樋キャンパスのラウハウザー
記念礼拝堂で結婚式を挙げ、私が大学宗教主任としてその司式をしました。大学の礼拝堂は様々
な用途に用いられますが、祝日など学生がいない日に、東北学院大学のOBやOGが結婚式を挙
げる場所として使用されているのを、学生の皆さんにはあまり知られていないのかもしれませんが。
皆さんも卒業後に結婚することになったら、この礼拝堂で結婚式を挙げることもできるといこう
とを、頭の片隅にでも入れておいてください。

さて、わたしたちの視点を本日の聖書に戻していきましよう。先ほど読んだのは「カナの婚礼」
という結婚披露宴を舞台にした物語です。どういう事情があったのか分かりませんが、イエス・
キリストは弟子たちと結婚の披露宴に出席していました。今日の日本人の披露宴でしたら、2く

3時間ほどですが、当時のユダヤ人の結婚の宴会は、数日間もかけて祝われていたそうです。そうして長々と続く宴会の途中で、ストックしておいたぶどう酒が全部飲み干され、切れてしまった。その時、イエス・キリストの奇蹟によって、水がぶどう酒に変わり、喜びの宴が滞りなく最後まで行われた、というエピソードです。ヨハネによる福音書では、イエス・キリストが公の生涯で、はじめて奇跡の業を表し、神としての栄光を明らかにしたのが、結婚式だったことが示されています。病人をいやすとか、嵐を鎮めるといった、現代科学では説明できない不思議なことが福音書には書かれています。ヨハネによる福音書では、イエス・キリストが行った最初の奇蹟が結婚にまつわることだったというのは、意外に知られていないかもしれません。

結婚の披露宴の陰で、水をぶどう酒に変えた。そんなのあり得ない、ばかばかしい。皆さんはこの箇所を読み、条件反射的にそう思うかもしれません。ですが、もう一度この奇蹟が起きた時の状況をじっくり見詰め直してみましよう。イエス・キリストが変えたぶどう酒が宴会の席に運ばれた時、そこで楽しんでいる人たちは誰ひとり、それがどのようにして自分たちのテーブルに運ばれて、集まっている人々に振舞われているのか分かっていませんでした。宴会の世話人ですら、二章一〇節で花婿に対して「誰でもはじめに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったところに劣つたものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました」と言っています。

実はこの見当違いの言葉の中に、今日わたしたちが聴きとるべき聖書のメッセージがあり、この婚礼の奇蹟の意味があると言えます。

聖書が伝えようとしているのは、本当に「良いもの」はどこから来るのかということです。本当に良いものは、主イエス・キリストの元から来る、主イエスによってもたらされるという、単純明快なことをストレートに伝えていきます。この聖書が記す婚礼では、結婚したカップルも入念に準備して、結婚式の日を迎えたと思います。しかし、宴の途中でぶどう酒がなくなってしまうというハプニングが起きてしまいました。おそらく結婚したその日から誰が悪いの、どっちのせいだ、と口論が始まりかねない場面です。結婚には、いや正確には結婚してからの人生は、思い描いた計画通りに行かないことが噴出てきます。自分にとってこれがいいことだ、自分たち二人にとってこれがいいことだと思つて、様々なことに取り組み、実行します。しかし、この聖書は、自分たちの想定を超えて、本当に良いものは、実は神の元から来るのだということを伝えるのです。

わたしたちの思いや知恵には限界があります。まったく思いもよらないハプニングや予想もしなかつた手違い等で狂い出した時に、その限界は露わになります。しかし、そのただ中に、主イエスは「本当によいもの」を、わたしたちに備えてくださる。それがわたしたちにとっての本当の奇蹟です。

結婚式では、新郎と新婦が、緊張しながら真剣に誠実に、互いに愛し合い、互いにいたわり合うことを誓い合う場面は、とても感動的です。しかしそれでも、なぜ結婚式が昔から教会で行われてきたのかを考える必要があります。互いに愛を誓い合う結婚という場において、愛を完成するのは、その二人ではなく、結婚式の司式者でもなく、神です。聖書は、愛は神からわたしたちのもとに来ることを伝えます。ヨハネの手紙は「神は愛である」と、神が愛であり、愛そのものであると伝えます。結婚式というのは、そういう意味でも、愛を完成させる二人が主人公であるというよりも、愛である神が、その愛をもって二人を一つに結ぶ主役であると言えるでしょう。二人を結ぶのは、確かにそれぞれの愛や努力が必要です。しかし、聖書が示すのは、神の愛です。愛を完成させ、本当に良いものをもたらしてくださいとくださる神こそが結婚の土台となり、最終的な基盤となるのです。それがキリスト教会の結婚式だと言えます。

これからの皆さんの人生で結婚を意識する時、東北学院大学で養い培った精神を思い起こしていただきたいと思えます。神が結婚を祝福し、皆さんの思いを超えて、本当に良いものをもたらしてください。それが東北学院が拠って立つ信仰です。

「対話のこころ」

大学宗教授任 吉田 新

マルコによる福音書 第二章二三節～一七節

13 イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集つて来たので、イエスは教えられた。14 そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見て、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がつてイエスに従つた。15 イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従つていたのである。16 ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言つた。17 イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

今年六月、アメリカ南東部サウスカロライナ州チャールストンの黒人教会で、一人の白人の青年が銃を乱射し、九人が亡くなる事件が起りました。犯人の人種差別的な思想が犯行の動機ではないかと報道されています。人種差別撤廃を掲げたキング牧師らによる公民権運動から半世紀がたちます。しかし、なおアメリカではこのような悲劇が繰り返されています。いや、アメリカばかりではなく、わたしたちが住まう国でもヘイトスピーチといわれるような、違った文化、民族の人たちに対してあからさまに差別の言葉が町なかで吐き出されています。わたしは海外で長く生活し、そこで生活している時に、よい思い出もたくさんありましたが、肌の色の違いゆえに、差別的な言葉を投げかけられたこともありました。人種差別はわたしにとって他人ごとではありません。

先の黒人教会で亡くなった牧師の葬儀で、オバマ大統領が演説し、その最後、彼は突然沈黙し、このように述べました。「Amazing Grace」。そして、歌いだしたのが先ほど、皆さんと一緒に歌いました有名な讚美歌「Amazing Grace」です。この讚美歌の歌詞を書いたジョン・ニュートンは、かつて黒人奴隷の商人でしたが、後に、黒人奴隷貿易に関わったことに深く反省し、罪人の自分にもかかわらず赦しを与えてくれた神の愛への感謝を歌にしました。

人が人を差別する。その背景は、他者に対する無理解、無関心があります。差別を乗り越えるためには言葉を交わし、対話を続けるしかないように思えます。ただ、おしゃべりをするのではなく、相手が何を求めているのか、自分は何を相手に求めているのか、何が必要か、自分には何が欠けているのかをしっかりと口にして、伝える。時には激しく言い合ったりしてもいい。しかし、対話は続けなければなりません。面倒臭くても最後まで徹底的に話し合うのです。

では、どのような対話をすればいいのか。今日の聖書の箇所はそのヒントがあります。先ほどお読みした聖書の箇所は、イエスと人々との食事の一場面の出来事です。当時の社会では、食事とは食卓を共に囲むことを通して互いの絆を深めることを意味します。わたしとあなたとは心を開き合った友人である。それを確認する行動です。食事が社会的な意味を持つていなのです。

イエスは罪人、つまり差別を受けている人々と食事を取りました。「罪人」というのは、わたしたちが現在、思い描いているような心理的な観念ではありません。律法を守らない(守れない)者です。律法を守る人々から、律法に違反する者に対して与えられた蔑称です。イエスはこの罪人たちと積極的に交わった。彼らの苦しみ、悲しみを担い、励まし、また同時に彼らを罪人に定めている社会の体制、支配者を批判する。その彼らとの交わりの行為が、絆を結ぶ「食事」とい

う行為です。

ですから、ラビ達から「あのような人々と食事をするのは、まかりならん」という発言ができません。これは当時の常識からすると、当たり前前の発言です。被差別者と食事してはいけないのです。イエスの行為と発言は排除されている「罪人」を招き、その者たちと食事をするることによって、当時の価値体系に対して根本的な批判をしています。それは同時に、「自分は正しい者である」と思っている人への静かな批判です。

わたしはこのイエスの言葉は、イエスの対話の姿勢をはつきりと表していると思います。この言葉を聞いた人々、特に罪人とされている人々は、自らが受けている差別をイエスは否定していると気付くでしょう。この言葉を聞いた人々の喜びは、どれほどのものだったか想像に難くないと思います。と同時に、イエスはイエスを批判したものに對し、彼らを徹底的に否定してはいません。自分だけが正しいと思っている者に対して、別の視点で物事を見ることを促しています。

本当の対話とは、相手の意見を否定し、それを封じ込めることではないでしょう。まずは新しい視点を相手に促し、それに気付いて、その結果、相手が「変わる」ものだと思います。人を無理やり変えることはありません。

心には扉、ドアがあるといえます。しかし、「心のドア」は普通のドアと少し違いがあります。わたしたちの「心のドア」には内側にしかドアノブがありません。ですから、相手の「心のドア」を無理に開けることができません。

相手の「心のドア」を開けるためには、どうすればよいのか。わたしたちは待つしかありません。まずは、自分の「心のドア」を相手に向かって開き、自由を尊重し、そして待つしかありません。イエスがわたしたちに教える「対話のころ」。それはわたしたちの「心のドア」をまず開くこと。信じて待つこと。そうすれば、差別する世界から、わたしたちは解放されます。まずは一歩、自分の「心のドア」を開いてみましょう。

「世を照らす光の到来」

総合人文学科長 出村 みや子

ヨハネによる福音書 第九章一―一二節

「さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。²弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。」³イエスはお答えになった。「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。⁴わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行かねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。⁵わたしは、世にいる間、世の光である。」⁶こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。⁷そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行つて洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行つて洗い、目が見えるようになって、帰つて来た。⁸近所の人々や彼

物が乞いであつたのを前にみていた人々が、「これは座つて物乞いをしていた人ではないか」と言つた。⁹「その人だ」と言う者もいれば「いや違ふ。似ているだけだ」と言う者もいた。本人は、「わたしがそんなのです」と言つた。¹⁰そこで人々が、「では、お前の目はどのようにして開いたのか」と言うのと、¹¹彼は答えた。「イエスというお方が、土をこねてわたしの目に塗り、『シロアムに行つて洗いなさい』と言われました。そこで、行つて洗つたら、見えるようになったのです。」¹²人々が「その人はどこにいるのか」と言うのと、彼は「知りません」と言つた。

主イエス・キリストが世を照らす光としてこの世に到来したことは、東北学院大学のスクールモットーである「地の塩、世の光」にも、また英語の Life, Light, Love For the World にも現れています。既に街角にはクリスマスの装飾が見られ、夜にはクリスマスのイルミネーションが点灯されていますが、東北学院大学で学ぶ皆さんには、クリスマスが元来は世を照らす光であるイエス・キリストのこの世への到来を記念し、祝う時であるとの意味が込められていることを覚えていただきたいと思ひます。

本日お読みした箇所には、主イエスが通りすぎりに出会った生まれつきの盲人をいやした物語が伝えられています。福音書には、イエスが病気で苦しむ人々や、当時の世界観によれば悪霊に取り憑かれていると思われる人々をいやされた記事が多く収録されています。医療施設や技術が発達した現代社会とは違い、イエスが出会った多くの貧しい人々は医者に治療してもらうことができず、困難な状態に置かれていました。このヨハネ福音書の物語は、イエスがなぜ救い主、メシアと信じられるようになったのかについて、私たちに色々と示唆を与えてくれますので、ひと時ご一緒に聖書から学びたいと思います。

まず皆さんに注目して頂きたいのは、二、三節の弟子たちとイエスとの会話です。イエスと伝道活動を共にしていた弟子たちが、生まれつき目の見えない人を見かけると、何と「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と尋ねたというのです。当時のユダヤ人の一般的な理解では、人が病気や不幸になるのは、ほとんどの場合は、本人が罪を犯したからであり、神様は罰としてその人を病気や不幸な目にあわせるのだ、と考えられていました。弟子たちもそうした当時の人々の見方を共有していたことになりました。病を始め、様々な不幸に襲われるのは、何らかの罪の結果であると言った因果応報的な考え方は決して古代の人々だけのものではなく、何らかの形で現代の社会にも見られます。

宗教がらみの人の弱みに付け込んだ霊感商法や浄霊の被害が後を絶たないのもそのためではないでしょうか。

弟子たちの問いに対するイエスの答えは、障害を持つ人々に対する弟子たちの偏見を正す力がある全く新しい教えでした。それはまた、現代世界に生きる私たちの心の中にある様々な「バリアー」から私たちを解き放ち、いわば「心のバリア・フリー」へと私たちのまなざしを向けてくれるものです。イエスは弟子たちに対してきつぱりと、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない」と、その誤りを指摘されたばかりではなく、「神の業がこの人に現れるためである」と告げました。ここでイエスが、因果応報的な考え方をはつきりと退け、生まれつき目が不自由であった人をいやしたばかりか、周囲の人々の偏見に満ちた考えからも解放したことは大変重要です。

次に四節以下をご覧ください。それからイエスは「わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。私は世にいる間、世の光である」と述べ、この日は安息日でしたが直ちにこの盲人の目をいやされました。イエスは土をこねて彼の目に塗り、シロアムの池で洗うようにと指示されましたが、こうした所作は原始的ないやしの伝承に多く見られるものです。シロアムの池の「シロアム」とは、ここで

は「遣わされた者」を意味すると説明されています。イエスは神から遣わされた者であるゆえに、安息日の主でもあるのです。

長い間目が見えないために、座って物乞いをする生活に甘んじていたこの人が、突然目が見えるようになって人々の前に現れたのですから、人々は驚いたに違いありません。なぜなら、聖書においてイエスが生まれつき目の不自由であった人をいやしたことには神学的に特別な意味があったからです。それは旧約聖書のイザヤ書に預言されたメシアの時代が到来したことを意味していたのです。ここでルカによる福音書四章一六節以下に記された、ガリラヤでのイエスの宣教が開始された場面を見てください。「イエスはお育ちになったナザレに来て、いつものとおり安息日に会堂に入り、聖書を朗読しようとしてお立ちになった。預言者イザヤの巻物が渡され、お開きになると、次のように書いてある箇所が目にとまった。

『主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、捕らわれている人に解放を、目の見えない人に視力の回復を告げ、圧迫されていた人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである』。

これはイザヤ書六一章の引用です。「油を注がれる」行為は古代イスラエルの王の即位式に由来し、救い主を意味する「メシア」とはまさに「油を注がれた者」を意味します。従ってイエスと

出会い、その力ある言葉と業を体験した当時の人々は、このイエスこそかつて預言者イザヤが予告した救い主メシアであると確信したに違いありません。当時視力の回復はまさに救い主メシアの業でありました。

この出来事に驚いた人々が、この盲人をいやした「その人はどこにいるのか」と尋ねましたが、彼は「知りません」と答えました。イエスは盲人をいやしてすぐにその場を立ち去り、決してその奇跡行為を誇ることをしませんでした。マタイ福音書一二章一五節以下によれば、この点もイエスが神によって選ばれた僕、救い主メシアであることを示しています。「イエスは皆の病気をいやして、ご自分のことを言いつらささないようにと戒められた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった」と記されているからです。

この物語はここで終わりではなく、後の出来事を語る物語が九章の終わりまで続いています。イエスが安息日に盲人をいやしたことが問題となり、このいやされた人はイエスを非難するファリサイ派の人々から二度も尋問され、会堂から追放されることとなります。しかしイエスを非難する彼らに対し、この人は三〇節以下でイエスの奇蹟行為を堂々と弁護したばかりか、主イエスに対する信仰を告白するに至り、神の業が現われたことを証言する者とされたのです。この両者の対照的なイエス理解に対して、三九節でイエスは「わたしがこの世に来たのは、裁くためであ

る。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」と告げています。ヨハネ福音書の特徴は、主イエスの行った奇跡行為の持つ霊的な意味の説明を行っている点にあります。イエスの行っていたやしの奇蹟は、イエスが誰であるか、またイエスがこの世に到来した意味は何かとの問題と深く結びついていることをぜひ覚えていただきたいと思えます。

「そして彼は、難民となった」

文学部教授

佐々木

勝彦

マタイによる福音書 第二章一三―二三節

13 占星術の学者たちが帰つて行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにどまっていなさい。ヘロデが、この子を探し出して殺そうとしている。」¹⁴ヨセフは起きて、夜のうちに幼子と母を連れてエジプトへ去り、¹⁵ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

16 さて、ヘロデは占星術の学者たちにたまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。¹⁷こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

18 「ラマで声が聞こえた。」

激しく嘆き悲しむ声だ。

ラケルは子供たちのことで泣き、

慰めてもらおうともしない、

子供たちがもういないから。」

19 ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、20 言った。「起きて、子供と母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」21 そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。22 しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガラリヤ地方に引きこもり、23 ナザレという町に行つて住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

二〇一五年も間もなく終わろうとしています。キリスト教の暦も「アドベント（待降節）」と呼ばれる期間に入り、大学の「クリスマス礼拝」もいよいよ来週にせまりました。しかしまさにこ

のとき、世界では、イスラム過激派によるテロ事件、イスラム国への空爆といった「暴力の無限連鎖」が始まっています。世界平和を守るといふ「怪しげな大義」のもとに、またもや、軍備拡張競争が熱を帯び、多大な予算が国防費につき込まれようとしています。このような状況のなかで、わたしたちはクリスマスをどのように迎えればよいのでしょうか。

今朝、取り上げた聖句には、イエス・キリストの誕生前後のことが記されています。それによると、「クリスマスの喜び」に水を差すような暴力事件が描かれています。その見出しは、「エジプトに避難する」↓「ヘロデ、子どもを皆殺しにする」↓「エジプトから帰国する」と続きます。ユダヤのベツレヘムに生まれたイエスが、幼児虐殺という暴力事件に巻き込まれ、両親と共に「エジプト」へ逃げて行きます。その後しばらくして、彼らはパレスチナに戻り、ガリラヤ地方のナザレという町に「引きこもって」います。

この三つの話には、いずれにも、父ヨセフ、母マリア、そして幼子イエス・キリストの遭遇した苦難について、それは預言の成就であったという解説が入っています。それによるとヨセフ一家は、運悪く暴力事件に巻きこまれたのではなく、「神の救いの計画」のなかでそれを経験したの

でした。では、その預言とは一体どんなものだったのでしょうか。

最初の「わたしは、エジプトからわたしの子呼び出した」（一五節）という預言は、ホセア一一・一の「まだ幼かったイスラエルをわたしは愛した。エジプトから彼を呼び出し、わが子とした」という句から引用されています。この預言は、モーセによる「出エジプト」の事件を想起しています。つまり、神はイスラエルを愛し、奴隷状態にあった彼らを呼び出し、神の選びの民、自由の民とした事実を想起しています。マタイは、奴隷状態から解放するこの神の愛が、今や、「神の子」イエス・キリストのエジプト行きとそこからの帰還により、全世界の民に及んでいる、と言おうとしているのです。

第二の預言は、エレミヤ三一・一五から引用されています。そしてこのすぐ後のエレミヤ一六・一七には、こう記されています。「主はこう言われる。泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる、と主は言われる。息子たちは敵の国から帰ってくる。あなたの未来には希望がある」と。ところが、マタイに引用されている一五節は、「ラケルは子供たちのことで泣き、なぐさめてもらおうともしない、子供たちがもういないから」という言葉で結

ばれていきます。そのためどうしても、ラケルの悲しみは癒されなのまま、放置されているかのような印象を受けます。しかしながら、マタイ福音書の最初の聴き手がユダヤ人キリスト者であったことを思い起こすならば、彼らはきつと、その後にく、**「あなたの未来には希望がある」**という言葉を思い起こしたにちがいありません。マタイによると、この未来の希望は、この難民状態に置かれた**「神の子」**イエス・キリストによって実現されるのです。

ここに出てくる**「ラケル」**は、後に**「イスラエル」**と呼ばれるようになった**「ヤコブ」**の妻です。彼女は、その第二子ベニヤミンを出産すると間もなく亡くなり、エルサレムの北八キロのラマに葬られました。やがてラケルは、北王国の祖先の母とみなされるようになり、前七二一年、その北王国がアッシリアによって滅ぼされると、人びとはこの亡国の嘆きをラケルの嘆きとして受けとめました。

しかもここには、さらに二つの痛みと悲しみの記憶が込められています。そのひとつが、エレミヤの体験した南王国滅亡の痛みと嘆きであり、もうひとつが、ヘロデに子供を殺された母親たちの苦痛の叫びです。したがって、耳を澄ませるならば、個々人の痛みと嘆き、そして民族の痛みと呻きの声が聞こえてくるはずですが、しかもマタイによると、これらすべてが、**今や、イエス・**

キリストの誕生と難民としての経験により、喜びに変えられるのです。

第三の「彼はナザレの人と呼ばれる」という預言には、そのままぴつたり当てはまる文言がありません。しかしながら、少なくとも新約聖書（例えば、ヨハネ一・四六）を読むと、「ナザレ」という町は蔑視されていたことが分かります。「ナザレ」から救い主メシアが現れる、とは誰も考えていませんでした。したがってマタイによると、救い主は、人びとの期待と異なり、都会の中心ではなく「辺境」に現れるのです。たしかにイエス・キリストの生まれた場所は、宿屋ではなく、馬小屋でした。

すでに登場しながら、まだ紹介していなかった人物は、ヘロデ（前七三年頃―前四年）とその息子アルケラオです。彼らは、イスラエル民族からみると外国人つまり異邦人であり、しかもこの親子は、その性格の残忍さと権力に対する異常な執着心のゆえに、圧政をしいた人物として知られています。ヘロデは自らの権力を確かなものとするために、妻を含めた身内の者六人を、そして三人の息子を容赦なく殺害しています。今日の聖句にも、独裁者の病的猜疑心と暴力志向がリアルに描かれています。イエス・キリストは、この本当に厳しい状況のなかを両親と共に生き

抜いた、とマタイは語るのです。

難民は、時に、食糧難民、経済難民、政治難民、戦争難民、そして環境難民と呼ばれるように、さまざまな事情から生まれます。しかし彼らには、いずれにも、「安全」、「安心」、そして「安眠」がありません。わたしたちのまわりにも、この意味で「難民状態」にあるひとが多いことは、周知の事実です。グローバルイズムと格差社会のなかで、子供も、若者も、中高年も、そして高齢者も、苦しんでいます。

イエス・キリストの誕生、それはこの現実のただ中で起こった出来事です。それゆえわたしたちは、クリスマスに差し込む「希望の光」に導かれつつ、世界の難民の苦しみと嘆き、難民状態にある隣人の痛みと嘆きに共感し、今日を、喜びをもって生きることが期待されているのです。

Even though the first servant had been forgiven by the merciful king, the first servant had not learned that he, too, must forgive others because others had forgiven him. Indeed, since the first servant had not forgiven others, the first servant himself would no longer be forgiven. The king took the first servant and threw him into prison.

We can learn a powerful lesson from these words of Jesus. Through this parable, Jesus teaches us that we must be people who forgive others. The God to whom we pray is like the king in the parable. Our merciful God has forgiven us all the sins we have committed against God, and that is why we can be intimate friends with God through belief in Jesus Christ. How wonderful it is to know that God has forgiven us for our many offenses against God. However, because God has graciously forgiven us, we too must forgive. And, as Jesus said, we must forgive over and over again, even when people continue to hurt us or to do unkind things that offend us.

Though it is often difficult to forgive, the results of forgiveness are great. When we forgive, it becomes much easier for us to throw away the anger, sadness, or worry we feel concerning another person. Forgiveness also makes it possible for us once again to be friends with that person. Because God has forgiven and continues to forgive us, let each of us learn that we, too, must forgive others—over, and over, and over again. To do so is to follow in the steps of Jesus Christ.

Servant, a simple but profound story that teaches us about what Jesus spoke of as the “Kingdom of Heaven.”

The servant in the story owed a substantial debt to the king, but he could not pay the money he owed. Thus, it was necessary for all his possessions to be sold. The money from the sale would be used to pay off his debt. The servant, however, begged the king to be patient with him and promised eventually to pay the king everything the servant owed him. The king mercifully canceled the debt. Undoubtedly quite relieved, the servant left the presence of the king.

Unfortunately, however, the servant had not learned the lesson he should have learned from the king’s merciful treatment of the servant, namely, the lesson about forgiving others. Shortly after leaving the presence of the king, the servant met another servant. This second servant owed the first servant a small sum of money. In fact, the money the second servant owed to the first servant was much less than the money the first servant had owed to the king. Like the first servant had done earlier when speaking with the king, the second servant asked the first servant to be patient with him; he promised eventually to pay the first servant the money he owed him. Unlike the merciful king, however, the first servant was unkind to the second servant and refused to let him pay the debt at a later date. Indeed, the first servant had the second servant thrown into jail because he could not pay his debt.

neighborhood, and Paul and I were no longer able to play together every day. I was very sad to see him leave. However, one day his mother called and invited me to come and visit them and to play with Paul. I was very excited and looked forward to the day when I could go and visit my good friend in his new house. When the day arrived, I went over and saw him for the first time in many months. We talked together for a short time. Then, however, a few of his new friends came by and he quickly decided he wanted to play with them and do what they were doing. In a way, it seemed to me that he had forgotten about me and our friendship of many years. He had hurt my feelings, and I was even a bit angry that he had not wanted to play with me as we had done so many times before when we had lived close to each other.

At times like the one I just described, it is often very hard to forgive people. We feel hurt and, sometimes, even a little angry. Often at such times, we do not want to forgive that person; rather, we want to do something to hurt that person and to make that person feel bad. That, however, is not the way Jesus told us to treat others.

Peter asked Jesus an honest question. He asked Jesus how many times we should forgive people when they hurt us. In other words, if people hurt us and offend us over and over again, should we forgive them, over and over again? Jesus answered Peter by telling him the parable of the Unmerciful

来は外に出で、自分の百デナリオンの借金をしている仲間に出
会おうと、捕まえて首を絞め、『借金を返せ』と言った。29 仲間
はひれ伏して、『どうか待ってくれ。返すから』としきりに頼
んだ。30 しかし、承知せず、その仲間を引っぱって行き、借金
を返すまでと牢に入れた。31 仲間たちは、事の次第を見て、非
常に心を痛め、主君の前に出て事件を残らず告げた。32 そこで、
主君はその家来を呼びつけて言った。『不届きな家来だ。お前
が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。33 わた
しがお前を憐れんでやるべきではなかったか。』34 そして、主
君は怒って、借金をすっかり返済するまでと、家来を牢役人に
引き渡した。35 あなたがたの一人一人が、心から兄弟を赦さな
いなら、わたしの天の父もあなたがたに同じようになさるであ
ろう。』

Forgiving other people can be difficult. Sometimes when people do things that hurt our feelings, we find it difficult to forgive them or even to talk to them. I am sure that each of you, at one time or another, has had a friend who surprised you by doing something that hurt your feelings. When people who have been our friends ignore us or do unkind things to us, it is often very difficult to forgive them.

When I was a young boy, I had a very close friend named Paul. We played together every day and we attended the same school. One day, however, Paul's family moved to another

thrown into prison until he could pay the debt. 31 When the other servants saw what had happened, they were greatly distressed and went and told their master everything that had happened. 32 "Then the master called the servant in. 'You wicked servant,' he said, 'I canceled all that debt of yours because you begged me to. 33 Shouldn't you have had mercy on your fellow servant just as I had on you?' 34 In anger his master turned him over to the jailers to be tortured, until he should pay back all he owed. 35 "This is how my heavenly Father will treat each of you unless you forgive your brother from your heart." (New International Version)

(訳)

21 そのとき、ペトロがイエスのところに来て言った。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか。」22 イエスは言われた。「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい。23 そこで、天の国は次のようにたとえられる。ある王が、家来たちに貸した金の決済をしようとした。24 決済し始めたところ、一万タラントン借金している家来が、王の前に連れて来られた。25 しかし、返済できなかったので、主君はこの家来に自分も妻も子も、また持ち物も全部売って返済するように命じた。26 家来はひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返しします』としきりに願った。27 その家来の主君は憐れに思って、彼を赦し、その借金を帳消しにしてやった。28 ところが、この家

“Forgiving Others”

文学部教授 David Murchie (マーチー デイビッド)

SCRIPTURE READING: *Matthew 18: 21-35* (マタイによる福音書第18章21～35節)

²¹Then Peter came to Jesus and asked, "Lord, how many times shall I forgive my brother when he sins against me? Up to seven times?" ²²Jesus answered, "I tell you, not seven times, but seventy-seven times. ²³"Therefore, the kingdom of heaven is like a king who wanted to settle accounts with his servants. ²⁴As he began the settlement, a man who owed him ten thousand talents was brought to him. ²⁵Since he was not able to pay, the master ordered that he and his wife and his children and all that he had be sold to repay the debt. ²⁶"The servant fell on his knees before him. 'Be patient with me,' he begged, 'and I will pay back everything.' ²⁷The servant's master took pity on him, canceled the debt and let him go. ²⁸"But when that servant went out, he found one of his fellow servants who owed him a hundred denarii. He grabbed him and began to choke him. 'Pay back what you owe me!' he demanded. ²⁹"His fellow servant fell to his knees and begged him, 'Be patient with me, and I will pay you back.' ³⁰"But he refused. Instead, he went off and had the man

「職業と信仰」

経営学部教授 松村尚彦

コリントの信徒への手紙二 四章十節

10 わたしたちは、いつもイエスの死を体からだにまっています。イエスの命いのちがこの体からだに現あらわれるために。

私は大学を卒業して、直ぐに会社に入り約20年間サラリーマンとして働いてきましたが、その歩みなかで、仕事にやりがいを持ってないと感じて、色々と悩んだことがあります。就職を控えた皆さんにとっても、自分がやりがいのある仕事に就けるかどうかは、とても大きな問題ではないかと思えます。そこで今日は、私自身の経験を交えながら、サラリーマンにとって仕事のやりがいとは何か、というテーマでお話してゆきたいと思えます。

私は大学時代、開発途上国を援助する仕事に就きたいと思っていました。大学の経済学部でそうした勉強をしていましたし、途上国援助の仕事は、クリスチャンとしても、聖書的な愛を実践

できる意義深い仕事だと考えていたのです。しかし希望していた援助機関の採用試験には落ちてしまい、あまり深い考えもありません、ある銀行に就職をしました。当然のことながら、銀行の仕事は自分のやりたい仕事ではありません。入行したての頃は、これから定年までの40年近くの間、こうしたやりがいの乏しい仕事を我慢してやり続けなければならないのかと思うと、目の前が真っ暗になったことをよく覚えていきます。

4月になると泊りがけの新人研修が始まったのですが、そこでは同期入社の人たちが、とても張り切って、テキパキと研修の課題をこなしていきます。そんなやる気に満ちた同期の人たちを見ているうちに、プレッシャーを感じたためでしょうか、私は神経性の腹痛で下痢が止まらなくなってしまうました。それ程までに当時の私は、銀行の仕事にやりがいが持てないことを悩み、神経が参ってしまったのです。

そんな私に転機が訪れたのは、新人研修が終わって銀行の支店に配属されて直ぐのことでした。私は支店で、計算係という事務の仕事を担当することになったのですが、私と一緒に計算係りの仕事をしていた女性行員の仕事振りを見ていて、ハッと気付かされたことがあったのです。彼女の仕事をよく観察していると、伝票を正確にチェックして、少しでも早く他の係りにまわすにはどうしたら良いか、ということだけを考えて、何の雑念にも煩わされることなく、無心で仕事に

没頭しているのです。計算係というのは、裏方の仕事です。一生懸命やっても誰かに褒められたり、感謝されるようなことはない機械的な仕事です。しかしたとえ誰に振り返ってもらえなくても、こうした小さな義務に忠実に励むことが、この女性にとって喜びとなっている、そうしたことが、ひしひしと伝わってくるような仕事振りだったのです。この女性の仕事に打ち込む姿勢を、清しく思い、小さな感動を覚えてからは、私も「やりがい」の問題を一旦忘れて、今まで以上に、仕事の段取りを工夫しながら、効率良く仕事ができるように、徹底的に気持ちを集中することになりました。すると不思議なことに、今まで頭の中でもやもやとして、私を悩ませていた色々な思いや雑念が消え、単純な一つの思いになって仕事に打ち込むことができるようになってきたのです。そしてこうした仕事の流れに身を任せているうちに、やりがいで悩んでいた自分が嘘のように、晴れ晴れとした気持ちになってゆくのが分かりました。これは傍目にはとても小さな出来事に見えると思いますが、私にとっては銀行の仕事を長く続けていこうという覚悟を与えられた大変大きな意味のある出来事でした。

ところで、先日ある心理カウンセラーが書いた本を読んでいたら、仕事のやりがいについて、とても面白いことが書いてありました。やりがいが持てないと言って相談に来るサラリーマンの中には、自分のやりがいに拘りを持ち過ぎてしまうあまり、いつまでたっても気持ちを定めるこ

とができない人がいるそうです。このため、ただ「何か他にいい職はないだろうか」という漠然とした思いを抱き続けたまま苦しむことになるのだそうです。

しかしこの心理カウンセラーによれば、本当のやりがいを得るためには、自分が今やっている仕事以外には他に選択の余地が無いという位の覚悟をすることが大事だと言います。そして逆説的ですが、このどん詰まりの中で、やりがいに固執する気持ちを放棄した時に、その時に、はじめて本当のやりがいが「向こうからやって来る」という経験をするのだと言っています。心理学では、こうしたやりがいに関する根本解決のプロセスを「サレンダー」、つまり「自我の敗北」と呼ぶそうです。仕事は確かに苦しいものです。しかしそこには、私たちの心の奥深いところで根を張っている、自己中心的な性格から、私たちを解放するような清らかな力が働いています。自己追求の態度を放棄して、この清らかな力に自分を委ねること、これを心理学では「サレンダー」、つまり自我の敗北と呼んでいる訳です。

そう考えると、この「サレンダー」という経験は、私たちキリスト者の観点からみても、大変興味深いものではないかと思えます。今日最初にお読みした聖書には、こんなことが書いてあります。

「わたしたちは、いつもイエスの死を体にとっています。イエスの命がこの体に現れるために。」

この言葉が神学的にどのような意味をもっているのかは、私にはよく分かりませんが、どうも私には、今お話ししたサレンダー、つまり自我の敗北ということと、聖書にある「イエスの死を体にとまとう」という言葉が、どこか深いところで関連しているように思えるのです。そして自我の敗北の後に「向こうからやってくる」力強い喜びの感情も、聖書にある「イエスの命」という言葉と、どこかで結びついているように思えてなりません。

皆さんの中には、もう既にこんな仕事に就きたいという希望を持っている方がいることでしよう。それはそれで大変素晴らしいことだと思います。しかしその志が叶わなかったり、なかなかやりがいを感じられずに苦しむ日々を経験こともあるかも知れません。そんな時に聖書は、そこで終わりではないこと、この苦しい道を通らされた人だけが知ることのできる「喜び」が、その先に備えられていること、そうしたことを私たちに教えているように思うのです。

もう既に就職が決まったけれど、自分のやりたい仕事はまだ分からないとか、あるいは将来仕事についていた時に、仕事に面白みを感じられないと思ったときに、今日の話の思い出しただけだと嬉しく思います。

「へボン」

工学部教授 星宮 務

フィリピの信徒への手紙 三章十二〜十四節

12 わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となつてゐるわけでもありません。何とかして捕らえようと努めてゐるのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられてゐるからです。13 兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思つていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、14 神がキリスト・イエスによつて上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目標してひたすら走ることです。

本日は、ローマ字に関係のあるアメリカ人の事を少しお話してみました。私たちが、クレジットカードをつくる時やパスポートを申請する時などに名前を登録するローマ字の正式な

名称を、皆さんはご存知でしょうか？

答は、「ヘボン式ローマ字」と言います。たとえば、私の名前でいいますと、「星宮 務」は、ローマ字で、“Tsumomu Hoshimiya”と書きます。”じ”のどころを“u”ではなく“su”、“し”のどころを“si”ではなく“shi”と綴るわけです。

また皆さんは、オードリー・ヘップバーンという女優さんをご存知でしょうか？直接映画をご覧にはなっていないでしょうが、「ローマの休日」などの名画に主演した大変エレガントな二十世紀を代表する映画女優でございます。

実は、最初に申し上げたローマ字の「ヘボン」という名前は、明治維新の十年ほど前、幕末に井伊大老が桜田門外の変で暗殺される前年の安政六年（一八五九年）に、日本にやってきたジェームス・カーティス・ヘボン（James Curtis Hepburn）という人物のことがいいます。

この方は、英語の綴りでは映画女優と同じ「ヘップバーン」と書くのですが、この方が来日された当時の日本人の耳には「ヘボン」と聞こえたため、ローマ字の名前がそのようになっていくわけです。今年はその生誕二百年にあたります。

では何故、二十世紀の現代に生きる皆さん方に百五十年も前に日本にやって来た古臭い人間の話をお聞かせしようというのか、と皆さんはお思いになると思います。

その理由は、まずこの方が医者という、我々と同じ理科系の人間であり、同時に信じられないくらい多くの業績をほかの分野でもあげた人だから皆さんに紹介したい、と思つたからです。

ヘボン氏は医者として、またキリスト教を伝道する宣教師として、日本にやってきました。そして彼は、武士・町人のへだてなく人々に医療を無償で提供しました。そのため庶民に心から慕われました。当時世の中に流行つた俗謡に

「ヘボンさんでも草津の湯でも、恋の病は治せない」

とうたわれたくらいでした。

ヘボンの人柄を表すエピソードを一つご紹介しましょう。ある時、ヘボンは下男に「定治郎」という人物を雇つたのですが、二週間ほどたつて、彼は「暇をくれ」と申し出ました。ヘボンが不思議に思つて、そのわけをたずねました。

すると彼のいうには、

「自分はある藩の武士で、あなたの内情を探り、隙があれば切り捨ててやろうと思つて使用人として入り込んだ。しかし、あなたは夷人とは思えないほど親切で、武士・町人を問わずに医术を施し、まことに仁義道徳をわきまえておられる方であつて、とても殺すには忍びない。自分の考えの間違ひを悟つたので、御免こうむつて藩に帰る」

とのことでした。尊王攘夷を叫んで殺しに來た武士をも、彼は感化してしまつたわけです。

他方で、彼は辞典の編集に没頭しました。「ヘボン辞書」と呼ばれている、日本語約二万語、英語約一萬語を収録した本格的な和英英和辞典『和英語林集成』を刊行し、横浜とロンドンで出版しました。

江戸時代まで日本はオランダ語でかかれたものでしか、西洋の知識が入つて來なかつたのですが、ヘボンによつて初めて、明治維新の前年には日本が世界とコミュニケーションする準備をすることができたのです。

ヘボンは夫人のクララとともに英語塾をも開きました。その塾に通つた弟子の一人が、慶応義塾を開いた福沢諭吉であることは有名です。

もう一つヘボンのなした業績の一つに、聖書翻訳事業があります。日本語で最初に聖書の全部の訳を完成したのは、ヘボンでした。

ヘボンは、聖書は万人が読むものとして和文体を採用し、翻訳を進めました。四つの福音書のうち、慶応三年（一八六七年）の火事によるマルコ福音書、ヨハネ福音書の訳文の消失、明治六年（一八七三年）までのキリスト教禁令など、さまざまな困難を乗り越えた末、明治十三年（一八八〇年）、新約聖書の全訳が完成しました。そして明治二十年（一八八七年）、旧約聖書の全訳も完成し、

ここに聖書の全訳の事業が完成したのです。それは私たちの所属する東北学院が始まる四年前のことです。

聖書の訳文は、その後ヘボンの全訳に基づいて、「明治元訳」という文語体の訳が誕生し、さらに大正時代の改訳を経て一九五五年（昭和三十年）に口語訳が完成しました。因みに私が東北学院中学高等学校で学んだのはこの文体でした。その後、カトリックとプロテスタントの両方の事業として一九八七年に刊行された「新共同訳」を、現在私たちは使用しています。

駆け足で、百五十年ほど前に日本にやってきた、ヘボンという「宣教医師」の生涯を見て参りました。近代日本の誕生に大きく寄与した英和・和英辞典の編纂、あまりにも大きな聖書の日本語全訳事業の完成、さらにその一方で、庶民にも心から慕われた献身的な医師としての医療奉仕。この三つのどれ一つだけとつても大変な努力を要する事業を、一人ですべて成し遂げたそのエネルギーの大きさに驚かされます。

同じ理科系の人間としてヘボンを見ると、私は初めに歌った讚美歌三七〇番の歌詞のように、お読みした新約聖書の箇所のように、人生と言う陸上競技場をひたむきに走り続ける一人の男の姿を見ることができます。

二十世紀最大の社会科学者の一人であるマックス・ウェーバーという人は、「禁欲的プロテスタ

ンティズム」という言葉で、勤勉に人生を生き続けるキリスト者を表現していますが、まさにヘボンという人はその表現にぴったり当てはまる人物ではないか、と私は思います。

この言葉に表される精神態度は、一言で要約すると「神はあらかじめ人間を救いにいたる選びと滅びにいたるものと分けており、人間は幾ら善行を積んでも選ばれることはできない。しかし、救いのしるしを求めて一刻一刻を大切にしておの職業に邁進すべきである。」

またこの考えから「誰かの人間を神のように崇拜したり、被造物である事物を絶対視してはならない。その故に、どんな人も神の前に偏り見られることはなく平等だ」という考えに至ります。ヘボンは禁欲的な労働を自分自身に課し、その結果、大変な事業である英和・和英辞書の編纂、聖書の全訳を成し遂げました。同時に身分の上下や、貧富の差を超えた施療活動を行い、ヘボンを斬りに来た人からさえ尊敬を集めていたのだ、と考えられます。

諸君たちが東北学院大学に入学して学ばれる意味は、大学で専門的な学問を身につけると同時に、「禁欲的プロテスタンティズム」の精神的な雰囲気の中で学ぶことがとても重要だ、と私は思っております。

祈ります。

「永遠の命」

工学部准教授 長 島 慎 二

マルコによる福音書 第十章十七節～二十二節

17 イエスが旅に出ようとされると、ある人が走り寄つて、ひざまずいて尋ねた。「善い先生、永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」18 イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもない。19 『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」20 すると彼は、「先生、そういうことはみな、子供の時から守ってきました」と言った。21 イエスは彼を見つめ、慈しんで言われた。「あなたに欠けているものが一つある。行つて持つている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」22 その人はこの言葉に気を落とし、悲しみながら立ち去つた。たくさんの財産を持つていたからである。

いま読みました箇所、金持ちの男の物語は三つの福音書に記されています。この男はルカによる福音書によれば議員であり、マタイによる福音書によれば青年です。若くて地位が高く金持ちであったのです。聖書から伺うことが出来るように真面目な青年でした。律法を守ることに熱心な青年であったわけです。ところが、そのような青年が、神様との関係において確信を抱くことが出来ないでいたのです。彼は、謙虚で素直な性格であったのでしよう。ナザレ出身の田舎教師であるイエス様に「先生」と呼びかけ、さらに「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」（十七節）と質問したのです。

そう、本日のテーマはこの質問にある「永遠の命」です。より具体的には、この青年の言葉通り、「永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか。」ということなのでしょう。本質的なテーマは、「永遠の命とは何なのか」ということ自体でありましょう。

結論から言えば、「永遠の命」とは何かをすることによって得られるものではないのであって、この青年の質問そのものが成立していません。新約聖書には「永遠の命」という言葉が多く記されています。ヨハネの手紙Ⅰには次のようにあります。

「初めから聞いていたことを、心にとどめなさい。初めから聞いていたことが、あなたがたの内

にいつもあるならば、あなたがたも御子の内に、また御父の内にいつもいるでしょう。これこそ、御子がわたしたちに約束された約束、永遠の命です。」(ヨハネの手紙Ⅰ二章二十四節～二十五節)

また、最後の晩餐におけるキリストの祈りの言葉を挙げましょう。

「永遠の命とは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」(ヨハネによる福音書十七章三節)

すなわち、永遠の命とはイエス・キリストを知り、キリストの内にいることなのです。そのイエスを前にして、青年は、何をすればいいのかを問うている。喜劇なのです。そこでイエス様は、全てを悟って、次のようにおっしゃいます。

『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え』という掟をあなたは知っているはずだ。」(十九節)

これは十戒ですが、「父母を敬え」以外は「何かをすること」ではなくて、「しないこと」の部分を挙げておられます。青年が求めているものは律法に全うしていることと共に、何かをすることに固執することの間違いに関して青年の気づきを促したものでしょう。しかし、青年は反発をし、イエス様は続けておっしゃったのです。

「あなたに欠けているものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさ

い。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」(二十一節)と。

あらためて、わたしたちは理解しなければなりません。そもそも、何かをすることによって救いを、永遠の命を得ようということは、どこまで行っても、有限な存在であるわたしたちにとつては「出来る範囲で」ということを含んでいるのであって、そこには神の存在は無いのです。ですから、イエス様は青年に対して、抛っている物から解放されてイエス様に従うように促されたのです。しかし、青年は従うことができなかった。青年が持っているものを売り払うことができなかったのは、何かをすることによって救いを得られるに違いないという青年の気持ちそのものを象徴していたからです。

さて、今日は読みませんでした。二十三節以降の弟子たちとの問答は、この青年との問答を受けてのものです。イエス様はおっしゃいます。

「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい。」(二十四節～二十五節)

金持ちが神の国に入ることはできないと明確におっしゃっているのです。もちろん、金持ちという言葉の意味は、単に財産があるという意味ではなくて、持っているものに依存して神の国に入ろうとする者を指しているのです。それでは、わたしたちはどうしたら良いのでしょ

うか。そう、結局はその論理は金持ちの青年と同じことになります。そうではないのです。すなわち、

「人間にできることではないが、神にはできる。神は何でもできるからだ。」(二十七節)

なのです。では、神は如何にしてわたしたちに永遠の命をお与えになるのでしょうか。それは次のみ言葉が明らかにしています。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書三章十六節)

ここに福音があるのです。

「人生を変える秘訣」

教養学部准教授 大澤 史 伸

列王記下 四章上六節

6 器^{うつわ}がどれもいっばいになると、彼女^{かのじよ}は、「もっと器^{うつわ}を持つておいで」と子供^{こども}に言ったが、「器^{うつわ}はもうない」と子供^{こども}が答えた。油^{あぶら}は止まった。

みなさん、こんにちは、私は大澤史伸と言います。現在、教養学部地域構想学科の教員をしています。大学では、「社会福祉概論」や「福祉サービズ論」などを教えています。どうぞよろしくお願います。

先日、テレビを見ると、鈴木亮平という俳優が出ていました。みなさんは、知っていますか？鈴木亮平は、一九八三年に兵庫県西宮市で生まれました。東京外国語大学を卒業、英検1級を所

持っています。大学在学中は演劇サークルに所属して、将来はプロになりたいということで、芸能事務所・制作会社に履歴書を持って回りますが、五十社以上に断られたそうです。そして、背が高いからということでも何とかモデル事務所に入れるようになりました。

鈴木売りは何と言っても、演じる役柄に応じて肉体改造を行うことで有名です。映画『HK／変態仮面』では、主人公を演じるため、体重を一度十五キロ増量したうえで、脂肪をそぎ落とすという役作りをしました。また、『天皇の料理番』では、主人公の兄で病弱な周太郎役を演じるため、体重を二十キロ減量、そして、現在、公開中の『俺物語!』では、巨漢の主人公を演じるため、体重を三十キロ増量しました。

彼は、五十社以上の芸能事務所に断られるという、ある意味では、俳優人生をスタートするにあたっては最悪な状況から出発しました。しかし、今、現在は個性派俳優として人気を得ています。今日の聖書の話しも人生最悪な状況を克服し、人生に勝利を収めた母子家庭の母親の話が載っています。共に聖書を見ていきましょう。

最悪な人生を変え、自分の夢を実現するために必要なことは、

①今、自分の持っているものを発見すること

四章一節を見て下さい。預言者の仲間の妻の一人がエリシャに助けを求めて叫んだ。「あなたの

僕であるわたしの夫が死んでしまいました。ご存知のようにあなたの僕は主を畏れ敬う人でした。ところが債権者が来て私の子供二人を連れ去り、奴隷にしようとしています。」とあります。つまり、この女性は夫が死んで、何らかの理由で借金を背負ってしまった。借金取りがその借金の代わりにこの女性の二人の子供を連れて行つて奴隷として売り渡そうというのです。まさに、この女にとっては人生最悪の状況だと言えます。

彼女は、神の使いであると言われるエリシャに助けを求めるのです。二節で、エリシャが、「何をしてあげられるだろうか。あなたの家に何があるのか言いなさい。」と促すと、彼女は、「油の壺一つのほか、はしための家には何もありません」と答えた。とあります。

女としては、今にも借金取りが来て、二人の子供を連れていこうとしている状況の中で、家にある油の壺一つが何の役に立つのかと思つたに違いありません。でも、エリシャはいうのです。その油の壺一つがあなたの人生を変えることができるのだということ。私たちは知らなくてはなりません。自分の中にあるもの、それは、自分から見ても、あるいは他の人から見ても大したことではないかも知れません。でも、聖書は言うのです。神様はそのような「油の壺一つ」であったとしてもそれがあなたの人生を変えることができるのだということ。

自分の人生を変えるための一つの方法は、自分の持っているものを発見することなのです。

② 協力者を得ること

次に自分の人生を変えるための二つ目の方法は、四章三節に書かれています。彼は、言った。「外に行つて近所の人々皆から器を借りて来なさい。」つまり、これはどういふことかということ、自分一人では無理なことも人々の協力を得るならびでできるといふことです。自分にとっての協力者を得ることが自分の人生を変える上では重要になつてきます。

ここで気を付けてもらいたいことは、協力者とは単なる仲の良い、友人ではないということです。今、自分の置かれてある状況を具体的に、實際的に助けてくれる存在なのです。ここでいふならば、実際に器を貸してくれる人々なのです。温かい言葉をかけてくれる人や励ましてくれる人も当然、必要なかも知れませんが、自分の置かれてある状況を實際的、具体的に變えてくれるような援助をしてくれる人を協力者として得ることは自分の人生を変える上でとても重要なことなのです。

③ あきらめないこと。

三番目に、自分の人生を変える上で大切なことは、あきらめないことです。四章六節を見て下さい。器がどれもいっぱいになると、彼女は、「もつと器を持つておいで」と子供に言ったが、「器はもうない」と子供が答えた。「油は止まった。」とあります。この話は最終的には、今まで集めた器に入った油を売つて借金を返済し、この女と子供は生活することができたということであらう。

終わっています。よく見ると、大金持ちになったと書いていないのです。なぜか、それは、子供が「器はもうない」と言った時に、油が止まったからです。

もし、もつと器を持ってきていたら、たくさんの油を手に入れ、それを売ってさらに豊かな生活ができたに違いありません。つまり、器の分だけ祝福があることを知らなくてはなりません。私たちがこの子供のように「器はもうない」。もう、これで十分だと思った時点で祝福は止まるのです。あきらめないで求め続ける人だけが多くの祝福を手に入れることを忘れてはいけません。

最後に、こんな話をして終わりたいと思います。十一月一日から四日まで大澤ゼミの四年生と大阪でゼミ合宿をしてきました。松下幸之助記念館にいろいろな話を聞いてきました。松下幸之助は現在のパナソニックの創業者で、世界中の人々から「経営の神様」と言われています。松下幸之助は、自分の成功の秘訣をこう言っています。「私は病弱だったから成功できた。私は貧乏だったから成功できた。私は学歴が無かったから成功できた。」

松下幸之助も今日の聖書の話しのように、①今、自分の持っているものを発見すること、②協力者を得ること、③あきらめないこと、によって現在のパナソニックを創業したのです。私たちも、自分の夢を実現するために共に歩んでいきましょう。

「神さまのまなざし」

東北学院史資料センター 日野 哲

マルコによる福音書 第二章四一節～四四節

41 イエスは賽銭箱の向かいに座^{すわ}って、群衆^{ぐんしゅう}がそれに金^{かね}を入れる様子^{ようす}を見^みておられた。大勢^{おおい}の金持ち^{かねもち}がたくさん入^いれていた。42 ところが、一人^{ひとり}の貧しい^{まず}やもめ^{よめ}が来て、レプトン銅貨^{どう}二枚^{まい}、すなわちクアドランスを入^いれた。43 イエスは、弟子^{でし}たちを呼^よび寄^よせて言^いわれた。「はつきり言^いっておく。この貧しい^{まず}やもめは、賽銭箱^{さいせんぼこ}に入^いれている人^{ひと}の中で、だれよりもたくさん入^いれた。44 皆^{みな}は有^あり余^{あま}る中^{なか}から入^いれたが、この人^{ひと}は、乏^{とほ}しい中^{なか}から自^じ分の持^もっている物^{もの}をすべて、生活費^{せいかつひ}を全^{ぜん}部^ぶ入^いれたからである。」

私たちは、自分が人からどう見られているかをとても気にしたり、それに敏感に反応したりします。また、何も言わなくても威圧的な視線で人を黙らせたりすることもできれば、逆に、温か

いまなごしを向けて、相手が話しやすい雰囲気を作り出したりすることもできます。さて、神さまは私たちをどのようにご覧になっておられるのでしょうか。

今朝の聖書の箇所は、「やもめの献金」という有名なお話です。イエス様は、エルサレム神殿の境内の片隅に腰掛けながら、人々の様子をご覧になっていました。イエス様の目の前には、十三の賽銭箱がありました。それぞれ献金の目的が違っていたそうです。それらの賽銭箱はらつぽの形をしていて、広い口の方から献金を入れるようになっていたと言います。ですから、音が響くようになっていたのです。じゃらじゃらと大きな音がすればたくさんのお金がされたことがわかりますし、ちゃりんとちいさな、寂しい音がすればわずかな献金ということが周りの人にわかってしまうわけです。人々は、なるべく大きな音がするように、わざわざ小さなお金に両替して、たくさん献金したように見せかけたとも言われています。

そこに、一人の貧しいやもめがやって来て、献金をしました。大勢の金持ちが聞こえよがしにじゃらじゃらと献金している中で、この貧しいやもめはレプトン銅貨二枚を献金しました。ちゃりん、ちゃりんと、寂しい音が二回響きました。そのやもめの献金する姿を見ると、イエス様は弟子たちを呼び寄せて、こう言われました。

「はつきり言うておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、誰よりもたくさん

入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

レプトンとは「うすいもの」という意味で、貨幣の中で一番小さな単位でした。今の私たちのお金に換算すると、二十円あるいは五十円くらいではないかと言われています。しかし、イエス様はレプトン銅貨とはいえ、持てるものすべてを献金したこの婦人こそ、他の誰よりも多くの捧げものをしたのだと言われたのでした。

実は、東北学院が創立された一三〇年前にも同じような出来事が実際に起こりました。創立者の押川方義とウイリアム・ホーイとが仙台に学校をつくりたいと熱心に祈り求めていた時、当時の土樋キャンパスの近くに住んでいた香味チカという未亡人が、長年老後のためにひそかに貯えていた古銀十二枚をすべて捧げたのです。ホーイは、次のように書いています。

「ある日のこと、押川兄弟が私の家にやって来て、十二枚の銀貨を見せました。押川兄弟は目に涙をうかべ、『私たちの祈りは聴かれ始めた』と言いました。」

この銀貨は「一分銀」という当時はすでに通用しなくなっていた通貨で、十二枚はほぼ五十日分の労賃に相当する価値がありました。一日の労賃をいくらと計算するかにもよりますが、仮に八千円から一万円だとすると、約四十万円から五十万円くらいになるでしょうか。これは、取る

に足りない金額でないことはもちろんですが、それによって学校が建つほどの巨額でないのも事実です。

この行為に心打たれたホーイは、自分でそのうちの九枚を買って、本国アメリカの外国伝道局本部に送りました。現地では、この内八枚を、この未亡人の行為に心動かされた教会員に買ってもらう、約五倍の献金となって、また東北学院に送金されてくることになりました。最後の一枚は、本学の姉妹校フランクリン・アンド・マーシャル大学の神学部（大学院）にあたるランカスター神学校に長い間保存・展示されていましたが、東北学院の創立百周年を期して、三十年前に本院に返されました。現在は、礼拝堂地下にある東北学院史資料センターに展示されています。

これら二つの物語から、私たちは神さまが私たちをどのように見ておられるのかがわかるような気がします。旧約聖書には、このように書かれています。

「人はうわべを見るが、主は心を見る。」

今日の物語は、二つとも捧げものについてですが、神さまは私たちが捧げるお金の額面をご覧になっているわけではありません。金額の大きさではなく、捧げようとする人の心をご覧になっているのです。聖書のやもめは生活費の全部を入れて、その後はどうやって生きていくつもりなのだろうかと私たちは心配します。でも私は、聖書には何も書かれていませんが、きつとイエス

様が何とかしてくださったに違いないと信じています。

老後の貯えを全て捧げた香味チカさんの行いも、国の内外で大きな反響を呼び起こしました。この行いから二十五年経って、東北学院が創立二十五周年を迎えた際には、記念式に参列した一行は大挙して自宅を訪れ、「天も破れよとばかりに万歳を連唱し、更に校歌を空に響かせて」特別の敬意を表した、と記録されています。

「人はうわべを見るが、主は心を見る。」私たちに注がれている神さまのまなざしを皆さんはどのように感じておられるでしょうか。私たちは、神さまが見ておられるという思いで、今日一日を過ごしたいと思います。それでは、お祈りいたします。

神さま、自分が願ったとおりに生きることは難しい私たちです。

まして、あなたが望んでおられるように生きることは、とうていできません。

それでもなお、あなたが私に目を注いでいてくださることに感謝いたします。

どうかあなたのみ前を歩む思いをもって、この一日を過ごすことができますよう
お守りください。

この祈りを、私たちの希望の源であられる主イエス・キリストのみ名をとおして

おささげいたします。

アーメン

編集後記

大学宗教主任 吉田 新

今年も「大学礼拝説教集」を出版できますことを感謝いたします。今年は諸般の事情から、大学宗教主任の数がこれまでより少ない体制で、大学の宗教活動を行わざるを得ませんでした。しかし、近隣の先生方のご協力により無事に三キャンパスでの大学礼拝を守ることができました。礼拝にご協力いただいた先生方に改めて感謝を申し上げます。ありがとうございます。

この「あとがき」を執筆しているいま、礼拝堂の正面には三本のろうそくが灯されています。アドベント、第三週を迎えています。

わたしが長く生活したドイツでは、クリスマスは家族と共に過ごす大切な時間です。そのため準備に余念がありません。ドイツでは二四日の午後から二六日にかけてお店は閉まります。その前に贈り物や食事のための買物を済ませる必要があります、休暇前の店舗は殺気立ったお客さんでいっぱいでした。「スープに使うためのお肉が品切れだ」、「早く包装してよ」、「そんなに文句ばか

り言わないでください」といったようなお客さんと店員の苛立った口論が、デパートの売り場にこだまします。ドイツの方々は「クリスマスの準備は滞りなく行うべき」という強迫観念に苦しんでいるようです。こちらも見えていて少し気の毒です。クリスマスの前のなにやら落ち着かない雰囲気と対照的に、クリスマス当日の町は、まさに静寂そのものでした。

以前、大学の寮に住んでいた時に、学位論文の提出期限も迫っていたこともあって、一人静かにクリスマスを迎えたいと思いました。そのことを他の同居人たちに告げると、「なぜ、一人でいるんだ?」「そんなさびしいことをするな」と言われました。数人の方から実家に来るように誘われましたが、丁重にお断りし、その年は一人で聖夜を迎えました。最初は大学の寮を一人で満喫できる嬉しさに酔いしれましたが、夜が更けるにつれ、だんだんと寂しくなってきました。

夜が明けて二五日、寂しさを紛らわせるために、近くの教会で開かれたコンサートに出かけました。演目はJ・S・バッハの『クリスマス・オラトリオ』でした。魂の深くに染みわたる音色に耳を澄ましていると、昨夜に抱いた寂しさは氷が解けるように消えていきました。『クリスマス・オラトリオ』の歌詞にこのような言葉があります。

わたしはあなたをどのようにお迎えしたらよろしいのでしょうか

どのようにあなたにお目にかかれればよろしいのでしょうか

ああ、世界のすべてのあこがれの君よ

ああ、わたしの魂の誉れ

イエス、イエスよ、どうか、あなたご自身がともし火となり、

何がお気に召すかを、

わたしに教え、示してください

わたしたちがイエスをどのようにお迎えするか、それを考えるのもクリスマスです。大勢で救い主の到来を歓迎するのも良いですが、一人、心静かにイエスをお迎えするのも大切だと思います。一人で過ごした降誕日、そのことを覚える忘れない聖なる日でした。

今年も大学の礼拝には多くの学生、教職員の方々が足を運んでくださいました。イエス・キリストはなぜ、この世界においでになったか。そして、わたしたちはイエスをどのようにお迎えしたらよいのか。礼拝に出席してくださったお一人お一人が、この問いを携えて、礼拝堂から出ていくことができたらと願います。

大学礼拝説教集

第 二十 号

二〇一六年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 野村 信

編集責任者 大学宗教主任 吉田 新

出版 社 株式会社 アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学 総務課

〒 980-8511 仙台市青葉区土樋一の三の一

☎〇二二・二六四・六四二八

